

茨城県西茨城郡友部町

お ば ら
小原遺跡

県営畠地帯総合整備事業(一般型)小原地区(北区)
平成16年度 埋蔵文化財調査報告

2005年

友部町小原遺跡発掘調査会

大成エンジニアリング株式会社

茨城県西茨城郡友部町

お ば ら
小原遺跡

県営畠地帯総合整備事業(一般型)小原地区(北区)
平成16年度 埋蔵文化財調査報告

2005年

友部町小原遺跡発掘調査会

大成エンジニアリング株式会社



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



PG01出土　弥生土器

序 文

友部町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、県都である水戸市に隣接、東京から約100kmの距離にあります。北西部に八溝山系が連なり、東南部の涸沼川沿いに東茨城台地と呼ばれる平坦な台地、北西部には友部丘陵と呼ばれる緩やかな丘陵地帯が広がります。現在では町内を高速道路や鉄道が走り、活気にあふれています。また、涸沼川・枝折川・涸沼前川などの水に恵まれ、豊かな可耕地であり、古代より人々が生活しやすい環境であったと思われます。

今回の調査は県営畠地総合整備事業にかかる発掘調査であります。この調査の結果、弥生・古墳時代の遺跡が確認され、地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が研究資料としてはもとより、教育・文化振興の一助として多くの人々に広く活用されることを強く願っている次第です。

最後に発掘調査・整理作業・報告書の刊行に際し、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係各機関ならびに各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

友部町教育委員会

教育長 坂倉 弘國

例　言

1. 本書は、茨城県西茨城郡友部町大字小原624番地外に所在する小原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、「県営畠地帯総合整備事業（一般型）小原地内（北区）」の平成17年度事業に伴い、埋蔵文化財の記録保存を目的として実施されたもので、友部町小原遺跡発掘調査会の委託を受け、友部町教育委員会の指導の下、大成エンジニアリング株式会社が実施した。
3. 調査は、埋蔵文化財調査部吉田寿を調査担当者とし、小宮山友康が補佐した。
4. 調査期間・調査面積は下記の通りである。
　　発掘調査 平成17年1月12日～2月10日
　　整理期間 平成17年2月11日～3月25日
　　調査面積 1,080m²
5. 本書は、服部敬史顧問の統括の下、吉田寿・小宮山友康が執筆し、小野真美・山崎裕子が編集協力した。また、執筆の文責を本文に記した。
6. 本調査に関わる出土品及び図面・写真類の資料は、友部町教育委員会が保管している。
7. 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々、機関からご教示とご協力を賜った。
　　池田晃一 寺内寛 能島清光 原信田正夫 茨城県教育庁文化課 ㈲阿部建設 ㈱茨中 ㈱キガ 株中央航業
8. 発掘調査及び整理作業参加者は下記の通りである。(50順、敬称略)
　　飯田明 小鹿江とき 小鹿江なみ 佐藤利男 佐藤八重子 塩畑昭子 塩畑勝利 島田与四郎 鈴木正
　　鈴木真知子 中村伊重 吹野當夫

凡　例

1. 本遺跡調査の略号はOBRである。出土遺物にも注記してある。
2. 本書の挿図・写真的表示は次のとおりである。
 - (1) 平成14年4月1日施行の測量法により、日本測地系が世界測地系に変更されたことから新座標(IX系)を使用した。原点はX=40460.000 Y=44780.000である。
 - (2) 検出遺物は下記の略号で表した。
　　SI…堅穴住居跡 SB…掘立柱建物 SD…溝 SK…土坑 P…小穴(ピット)
　　SX…性格不明遺構
3. 実測図は基本的に下記の縮尺とし、スケールを図中に示し、遺物写真は概ね実測図の縮尺に準じた。
　　遺構実測図 1/60 窯・炉 1/30 遺物実測図 1/3
4. 遺構実測図中の方位は座標北を示す。

目 次

卷頭図版

序 文

例 言 / 凡 例

日 次 / 挿図目次 / 挿表目次 / 図版目次

I 調査概要	4 古代	27
1 調査に至る経緯	1	
2 地理的位置と歴史的環境	1	
3 調査方法と経過	5	
4 基本層序	6	
II 検出された遺構と遺物	III まとめ	32
1 繩文時代	1	
2 弥生時代	34	
3 古墳時代	36	
8 写真図版	39	
9 報告書抄録	60	
18		

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/7500)	第15図 SI01遺物実測図 (1)
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	第16図 SI01遺物実測図 (2)
第3図 調査地点位置図	第17図 SI02実測図・遺物実測図
第4図 基本層序	第18図 SI06実測図 (1)
第5図 遺構配置図	第19図 SI06実測図 (2)・遺物実測図 (1)
第6図 SK01実測図	第20図 SI06遺物実測図 (2)
第7図 SK02・3実測図	第21図 SI03実測図
第8図 SI04実測図・遺物実測図	第22図 SI03実測図・遺物実測図 (1)
第9図 SI05実測図・遺物実測図 (1)	第23図 SI03遺物実測図 (2)
第10図 SI05遺物実測図 (2)	第24図 SB01実測図・遺物実測図
第11図 PG01実測図・遺物実測図	第25図 SB02実測図・遺物実測図
第12図 SD01実測図	第26図 SB03実測図
第13図 遺構外遺物実測図	第27図 SX01実測図・遺物実測図
第14図 SI01実測図	

挿表目次

第1表 周辺の遺跡	第7表 遺物観察表 (5)	第13表 遺物観察表 (11)
第2表 調査工程表	第8表 遺物観察表 (6)	第14表 遺物観察表 (12)
第3表 遺物観察表 (1)	第9表 遺物観察表 (7)	第15表 遺物観察表 (13)
第4表 遺物観察表 (2)	第10表 遺物観察表 (8)	第16表 住居跡規模一覧
第5表 遺物観察表 (3)	第11表 遺物観察表 (9)	
第6表 遺物観察表 (4)	第12表 遺物観察表 (10)	

図版目次

図版 1	1. 調査区全景 2. 調査区全景 3. 調査風景	図版 5	1. PG01完掘状況 2. SD01西壁土層断面 3. SI01掘り方	図版 9	1. SI03完掘状況 2. SI03完掘状況 3. SI03土層断面
図版 2	1. SK01完掘状況 2. SK01土層断面 3. SK02土層断面	図版 6	1. SI01検出状況 2. SI01カマド土層断面 3. SI02完掘状況	図版10	1. SI03掘り方 2. SI03カマド土層断面 3. SB01完掘状況
図版 3	1. SK03上層断面 2. SI04完掘状況 3. SI05検出状況	図版 7	1. SI02掘り方 2. SI06掘り方 3. SI06土層断面	図版11	1. SB01 P6土層断面 2. SB02 P3土層断面 3. SB02 P3土層断面
図版 4	1. SI05完掘状況 2. SI05炉跡完掘状況 3. SI05炉跡上層断面	図版 8	1. SI06 P1+土層断面 2. SI06 P2土層断面 3. SI06 P3土層断面	図版12	1. SB03完掘状況 2. SX01完掘状況 3. 調査風景

友部町小原遺跡発掘調査会組織名簿

会長	坂倉 弘國（友部町教育委員会教育長）
副会長	白田 清郎（友部町文化財保護審議会会長）
理事	深谷 忠（友部町文化財保護審議会委員）
理事	友部平重郎（友部町文化財保護審議会委員）
理事	高野 克巳（友部町文化財保護審議会委員）
理事	檜山 成勇（友部町文化財保護審議会委員）
理事	南 秀利（友部町文化財保護審議会委員）
理事	鈴木 登（友部町文化財保護審議会委員）
監事	岡本 規雄（友部町教育委員会生涯学習課長）
幹事	島田 武夫（友部町教育委員会生涯学習課長補佐）
幹事	橋本 務一（友部町教育委員会生涯学習課係長）
幹事	海老沢 仁（友部町教育委員会生涯学習課主幹）
調査員	吉田 寿（大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部主任調査員）
指導員	寺内 寛（元茨城県教育財團調査課長）

大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部

学術顧問	服部敬史・安孫子昭二
部長	早川 泉
課長	板野伸彦
調査員	吉田 寿・小宮山友康

I 調査概要

1 調査にいたる経緯

畠地帯総合整備事業は、かんがい施設、道路、農地などの生産基盤の整備とあわせて、生産環境や集落環境を改善するための施設などを地域の実情に応じて一体的に整備することによって、生産性が高く、効率的な畠作農業地域を作る事業であります。そして、畠作かんがい施設の整備により、生産可能な作物品質の拡大、作物の収穫の増加、品質の向上（生産物単価の上昇）あるいは、農道の整備による輸送経費の削減、荷傷み防止による品質向上。そして、区画整理による労働生産性の向上などの効果が期待されています。

友部町でも第四次総合計画で6つの目標に沿った基本施策を定めています。その重点施策の一つとして産業振興プロジェクトがあり、農林業の振興が図られることになります。そのために農業生産基盤の整備が進められ、その一環として畠地帯の整備が行われています。友部町小原地区の土地改良事業もそのような環境の中で、小原地区土地改良組合が設立され、県の指導を受けながら実施することになりました。

計画地は常磐線を挟んで北区（小原遺跡）と南区（三本松遺跡）の二地区に別れていますが、の中でも北地区には山王塚古墳など町内最大の古墳を有する一本松古墳群があり、重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域であることは良く知られていました。そのため、町教育委員会は平成14年度以来、区画整理計画地内の開発にかかる範囲について、笠間市文化財審議会委員の能島清光氏に試掘による確認調査を依頼し、その結果に基づいて、大成エンジニアリング株式会社に調査を委託してきました。すなわち平成14年度は、南区（三本松遺跡）において3400m²の調査範囲に弥生時代、古墳時代さらに古代から中世にいたるきわめて密度の濃い集落跡が発見されました。15年度には北区の幹線道路2号建設用地の1260m²の調査範囲に縄文時代から弥生時代、古墳時代の住居跡等が発見されました。そして16年度の今回は、北区の幹線道路1号建設にかかる1080m²を調査することになりました。

2 地理的位置と歴史的環境

地理的位置

暖地性植物分布の北限に近い友部町では、丘陵地域の植生では照葉樹と落葉広葉樹林が混交しており、カシ類、ツバキ類、イヌシデ・コナラ群類などの樹種が確認される。必ずしも原始・古代の植生を反映したものではないだろうが、留意される点である。

茨城県のはば中央部に位置する友部町は、東部は水戸市・茨城町に、南部は涸沼川を隔てて西茨城郡岩間町に、西部は笠間市に隣接している。町域は、東西約11km、南北約13km、面積は約59km²である。町の北部を国道50号線、西部を国道355号線が走っており、JR常磐線と水戸線が友部駅で分岐している。また現在は常磐自動車道が町の南端部を通過しているが、友部ジャンクションで北関東自動車道が結ばれるようになると、北関東圏における東西交通の幹線として機能することが期待されている。

友部町は、山地及び丘陵地、台地、沖積低地に分かれるが9割方は緩やかな丘陵と平地で、涸沼川、涸沼前川などの中小河川にも恵まれて、生活するには良好な自然環境にある。北部・西部は鶴足山塊から南西に延びる丘陵地（友部丘陵）で、標高50～90mで広い平坦地を残している。丘陵を構成する層は友部層と呼ばれる更新世の海成砂疊層で、上層には関東ロームをのせている。中央部から南東部の台地は、東茨城台地の一部をなして大洗

町方面に広がっている。基盤となる第二紀層は見和層上層部と呼ばれ、砂・礫・粘土層によって構成されており、上層には関東ロームをのせている。南西部の山地は標高228mの金比羅山を中心に構成され、山地東側は国見山付近に水源をもつ潤沼川によって開拓されており、沖積低地は水田となっている。中央部の台地北側には、北部丘陵を水源とする潤沼前川が北西から南東に流れ、流域には水田が拓かれている。

本遺跡は、その潤沼前川左岸の標高36~39mの丘陵縁辺部に立地している。弥生時代にはじまり、古墳時代から古代、中世にかけて営まれた集落跡である。沖積地の水田も弥生時代の墳から拓かれたものであろう。

歴史的環境

町域には多くの遺跡が確認されている。ここでは小原遺跡周辺の主な遺跡について概観する。

『友部町史』によれば、町内には縄文時代の遺跡が36ヶ所ほど確認されている。遺跡は、潤沼川流域をはじめ前潤沼川、潤沼川の支流枝折川の沿岸およびこれらの河川にそそぎ込む台地上に立地するという。先年、調査した宍戸カントリークラブのアプローチ道路の善九郎古墳群でも中期の住居跡と貯蔵用の土坑が検出され、かなり大規模な集落の存在が予測された。

弥生時代には、後期になってひたちなか市東中根遺跡や長岡遺跡に代表される遺跡が急激に増加する。並形土器が主体となる独特の土器組成で、弥生末期に成立する十王台式土器に引きがれていくようである。友部町内には8ヶ所の散布地が知られていたが、2000年に調査された茨城県教育財団による久保塚遺跡ではじめて弥生後期の住居跡が発見された。本事業にもともなう平成14年度の南区・三本松遺跡の調査で弥生後期の住居跡が14軒検出され、また本事業の15年度の北区・幹線道路第2号の調査でも1軒検出された。この地域が弥生後期になって集落が形成されるようになり、やがて古墳築造の基盤をなしたことが示唆される。

茨城県下は関東地方でも群馬・千葉県に次ぐ古墳・古墳群が存在しているところである。とくに常陸太田、ひたちなか、石岡周辺、そして霞ヶ浦の北岸・南岸には、古墳群が集中して形成された。茨城県における古墳の特徴は、前方後円墳の造営が7世紀代にまで引きがれる東国でも特異な事象となっている。また、方墳の発達や組合式箱式石棺の埋葬施設を多く採用するなども特徴である。

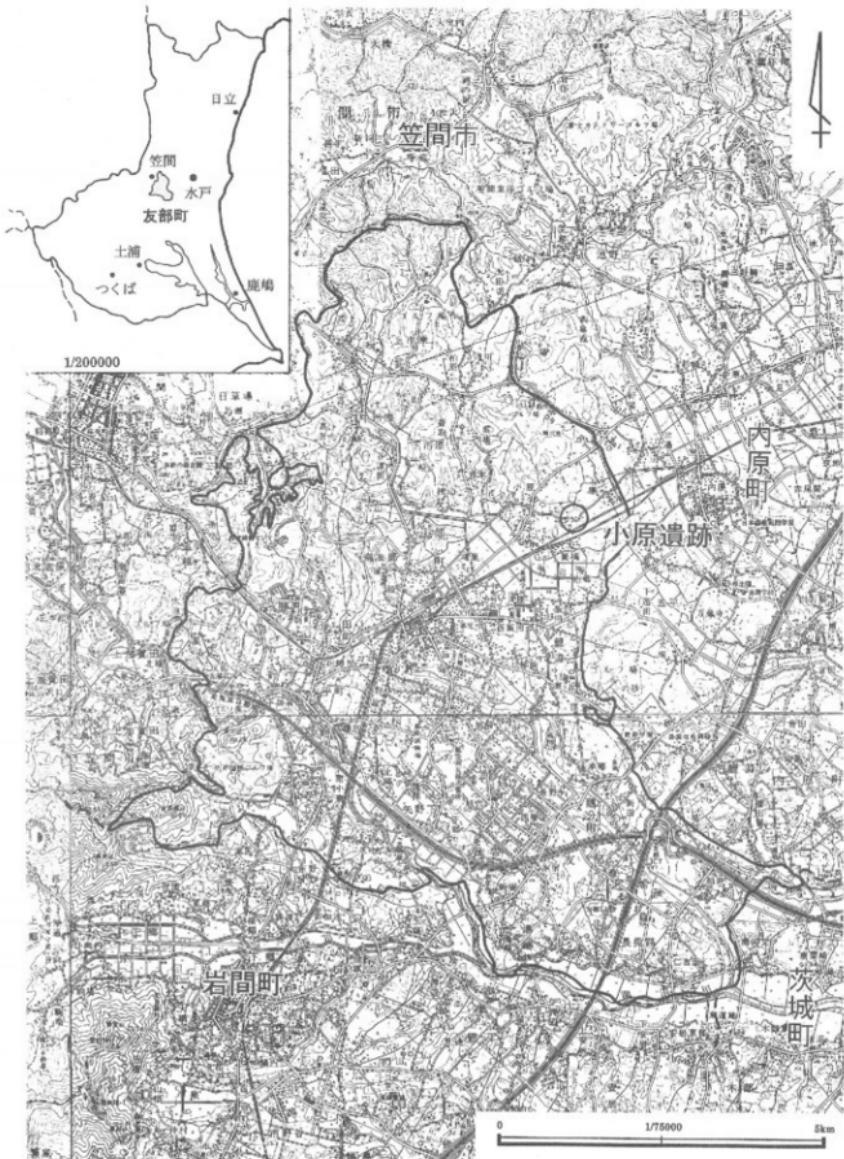
友部町の古墳は潤沼前川流域に多く集中しており、柳沢古墳群・一本松古墳群などの例が確認される。特に町指定史跡の「一本松古墳群」は前方後円墳2基、円墳1基で、本遺跡と何らか密接な関わりがあるものと考えられる。また東部に芝沼古墳群、南部に佐藤林古墳群、善九郎古墳群などが所在する。

これらを造営した集団の集落跡は古墳群と対応するように存在していると思われるが、その分布は必ずしも明確ではなかった。町史によれば、潤沼前川、潤沼川流域の丘陵台地上にはそれぞれ10個所近くの散布地が認められ、古墳時代前・後期の集落跡が存在するとみられる。1997年からはじまつた北関東自動車道関係の遺跡調査や翌年の総合流通センター事業地内の遺跡調査により、潤沼川沿いの地域で、小峯A・B遺跡、仲丸遺跡、久保塚遺跡などの当該期の集落が明らかにされた。このうち仲丸遺跡からは、後期の住居跡が22軒検出されている。平成14年度の本事業の南区・三本松遺跡の調査でも古墳時代の住居跡が14軒検出された。また、これまで前期に属する遺跡は資料的に恵まれなかつたが、平成15年度の幹線道路第2号の調査で住居跡の存在が確認された。

奈良・平安時代の町域は、茨城郡と那珂郡とにまたがっていた。この時代の遺跡としては潤沼前川を挟んだ対岸に北半遺跡があり、近年行われた調査において9世紀代を中心に基盤土器が確認されている。また三本松遺跡の調査では、限られた範囲ながら大小64軒もの住居跡が検出されている。

中世以降のものとしては、小原城跡が町の指定史跡として、本丸のみが現状保存されている。

(吉田)



第1図 遺跡位置図(1/7500)



第2図 周辺遺跡分布図(1/25000)

第1表 周辺の遺跡

友部町					
遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期		
			縄文	弥生	古墳
1 四十八塚	古墳				平成10年発掘調査
2 松崎台遺跡	包羅地	○			
3 佛穴古墳群	古墳群		○	円墳7基	
4 大日山古墳群	古墳群		○		
5 喜歎、浜場遺跡	包羅地	○			平成6年発掘調査
6 原古墳	古墳		○		
7 喜平古墳群	古墳		○		
8 原坪古墳群	古墳		○		
9 高寺古墳群	古墳群		○	円墳8基、昭和50年発掘調査、町指定史跡(2号墳)	
10 小原城跡	城跡跡				町指定史跡(本丸跡のみ)
11 小原遺跡	包羅地	○ ○ ○			
12 一本松古墳群	古墳群		○	021と同じ地域、前方後円墳2基、円墳1基、町指定史跡	
13 三本松遺跡	包羅地	○			
14 家前古墳	古墳		○		
15 久保遺跡	包羅地	○			
16 丹後原古墳	古墳		○		
17 北平遺跡	包羅地	○			
18 神部駒古墳群	古墳群		○	円墳7基	
19 家前遺跡	包羅地	○ ○ ○			
20 田端内遺跡	包羅地	○ ○ ○			

友部町					
遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期		
			縄文	弥生	古墳
21 五平古墳群	古墳群			○	円墳6基
22 五平内原遺跡	包羅地	○ ○ ○			

内原町					
遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期		
			縄文	弥生	古墳
23 三軒巣古墳群	古墳群			○	4基
24 宮前遺跡	包羅地	○			
25 神台遺跡	包羅地	○	○	○	
26 西川遺跡	包羅地	○	○	○	
27 金開遺跡	包羅地	○			
28 向山遺跡	包羅地	○	○	○	
29 新道治治南遺跡	包羅地	○ ○ ○			
30 潤中前遺跡	包羅地	○	○	○	
31 小林遺跡	包羅地		○		
32 下道出遺跡	包羅地	○ ○			
33 大舉古墳群	古墳群			○	2基



第3図 調査地点位置図

3 調査方法と経過

区画整理北区計画地のほぼ中央に、西から東に開口する支谷が入りこんでいる。今回の調査個所は、その開口部に近い南側微高地という絶好の位置にあり、栗などの樹木が伐採されて見渡すかぎり更地となった中に、計画道路は幅7mで南北方向に延びる長さ180mの範囲が調査対象地であるが、両側0.5mを安全策として残し、調査面積は1080m²とした。

今次調査に先立っては、平成16年6月16日に、笠間市文化財保護新議員能島清光氏による埋蔵文化財確認調査が実施されている。このときは植栽されていた栗畠の間に試掘坑が4ヶ所設定され、弥生時代および奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されて、本調査の必要性が説かれている。

調査はまず、重機により盛土ないし表土を除去したが、30~35cmでローム土に達したので人力作業に切り替え、鋤籠等により遺構確認作業を行った。これにより竪穴と思われる数箇所の落ち込みが確認されたが、南北両端の沖積面に下りる緩傾斜では渴水期にもかかわらず水が涌きだす状況であった。

重機掘削を終えた時点での公共座標（世界測地系座標IX系）を基準とした一辺10mの正方形グリッド杭を設定し、標高を取り付けた。座標杭には、西から東へ1・2…、南から北へA・B…の仮称を付し、南西隅にあたる杭の仮称をもってグリッドの呼称とした。また、遺構ごとにセクションを設定し、覆土を掘削した。遺構番号の呼称は、前述の略号を用い遺構種別ごとに1番からの連番とした。

出土した遺物は、原則として遺構ごとに一括して取り上げた。写真による記録は、35mmモノクロ・カラーリバーサル及びネガカラーを使用し、断面・完掘・遺物出土状況等を適宜撮影した。記録は、基本的に光波測距儀を用いて観測を行い、遺構図を作成した。また土層断面等は、手取りによって図面の作成を行い、グリッド杭の標高を基準に計測した。

最後に、遺構調査が終了した2月7日の午後に、RCヘリによる空撮を行い、現地調査をすべて終了した。

4 基本層序

調査区域周辺の現況は畠地である。しかし、南側は水はけが非常に悪い為か當時ぬかるみ、湿地という印象を受ける。地形的には調査区中央部の標高39.5m前後を頂点とし、北側および南側では下傾斜していく。特に北端部では現在形成されている水田面（標高37.0m）まで傾斜しており、傾斜度がきつい。一方、南端部は標高37.5mと数値上では北側との標高比高差は目立たないが、中央部からなだらかに傾斜しており北端部ほど傾斜は気にならない。

包含層の堆積状況は良好ではない。南北方向に長い調査区域内において表土層の下位から直接ローム層に移行する箇所も存在し、比較的良好な箇所でもかろうじて表土層以下15~25cmでローム層に移行する。これは一つに農作業に伴う天返しなどが頻繁に行われたこと、加えて開発工事に伴う拔根や土取り（土量移動）が既に開始されていたことが要因として挙げられる。前者については調査区北側でローム層中にまで及んでいる箇所が多かった点からも伺える。

第4図は本遺跡の基本的な土層堆積である。上記した比較的良好な包含層といえる調査区南部（E-3区）東壁にテストピットを設定し、その断面観察により概ねⅠ~Ⅵ層を基本層序とした。しかし、第Ⅴ層以下は湧水のため詳細な記録観察はできなかったことをお断りしておく。また最上部にある本来の表土は、造成工事により消失している。本調査において遺構検出はⅡ層下部~Ⅲ層上部にかけて行った。

第2表 調査工程表

月日	1月																												備考			
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8				
調査準備	■																															
表土掘削	■	■																														
遺構確認			■	■																												
S101~06					■	■																									弥生・古墳・古代住居跡	
SK01~03						■	■	■																						繩文土坑		
SB01~03							■	■	■																					古代掘立柱建物跡		
PG01																																
SD01																																
SW01																																
SX01																																
備考				事務所設置													現場閉鎖	現地見学会														ヘリによる空撮

第Ⅰ層：層厚20cm前後を測る、暗褐色をおびた「耕作土」と思われる。 ϕ 1～2 mmの橙色粒を少量含んでおり、粘性・しまり共にある。

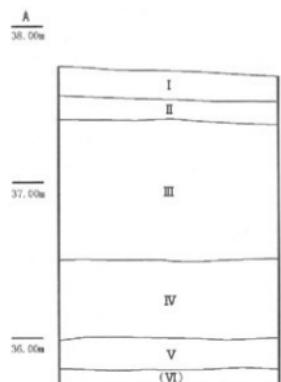
第Ⅱ層：層厚10～15cmを測り、茶褐色をおびる。表土に近似するものの、橙色粒を多量、ローム粒を少量含んでいる。Ⅰ層に比べて粘性・しまり共にやや強まる傾向にある。

第Ⅲ層：85～90cmを測り、黄褐色をおびた「ローム」層となる。粘性・しまり共に強い。

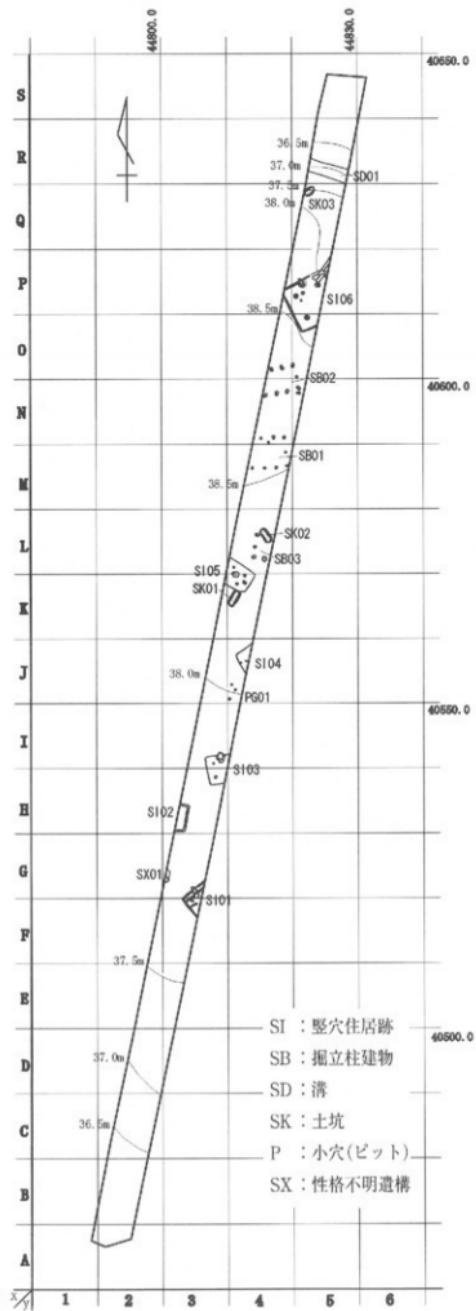
第Ⅳ層：黄灰色をおびたいわゆる「アワ土」と呼ばれる約3万年前の赤城火山を給源とする鹿沼土層で、層厚は約50cmを測る。粘性は弱く、しまりが強い。

第Ⅴ層：明茶褐色をおびたロームで、層厚は約20cmを測る。

(第VI層：湧水の為、観察不能)



第4図 基本層序



第5図 遺構配置図

II 検出された遺構と遺物

1 繩文時代の遺構

SK01 (第6図)

調査区中央、K-4グリッドに位置し、標高は38.1mを測る。長軸方向はN-29°-Eをとる。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸2.6m・短軸1.2m・深さは0.95mを測る。底面は長軸2.2m・短軸0.5mの梢円形を呈し、平坦である。底面から0.4~0.5mの高さより上部が外傾する。

覆土は6層に分けられ、自然堆積の状況を示している。

出土遺物はない。

SK02 (第7図)

調査区中央、L-4グリッドに位置し、標高は38.2mを測る。長軸方向はN-35°-Wをとる。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸2.4m・短軸1.1m・深さは0.95mを測る。底面は長軸1.95m・短軸0.5mの梢円形を呈し、平坦である。底面から0.7mの高さより上部が外傾する。

覆土は7層に分けられ、自然堆積の状況を示している。1層を切る0層はSB03の掘込である。

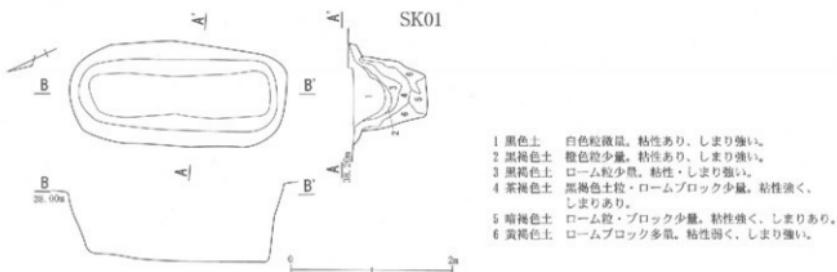
出土遺物はない。

SK03 (第7図)

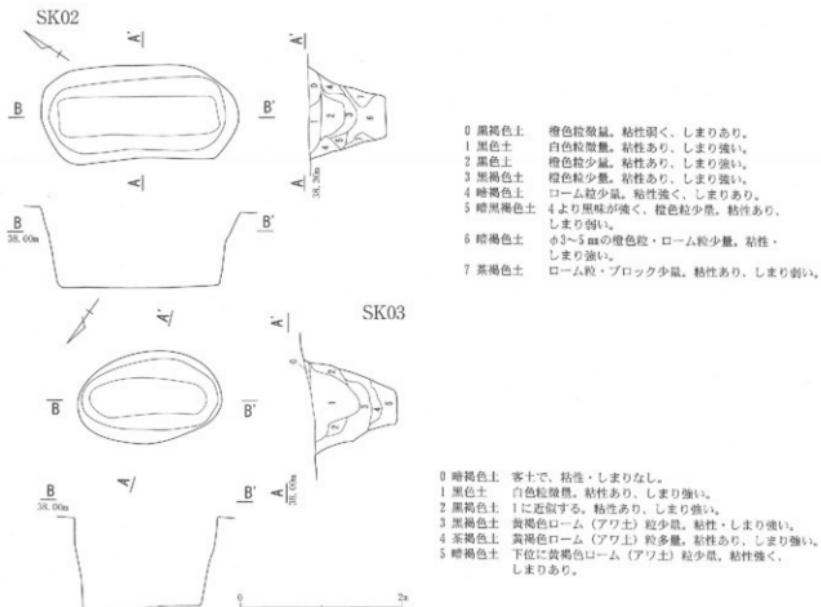
調査区北側、Q-5グリッドに位置し、標高は37.7mを測る。長軸方向はN-52°-Wをとる。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸1.7m・短軸1.1m・深さは1.2mを測る。底面は長軸1.45m・短軸0.45mの梢円形を呈し、北側にやや傾斜する。底面から0.6~0.7mの高さより上部が外傾する。

覆土は5層に分けられ、自然堆積の状況を示している。

出土遺物はない。



第6図 SK01実測図



第7図 SK02・3実測図

2 弥生時代の遺構と遺物

SI04 (第8図)

調査区中央、J-4グリッドに位置し、標高は38.3mを測る。本址は西側約3分の1を調査したが、大半は調査区外に出る。平面形は部分的な調査の為に断言できないが、隅丸長方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は長軸3.3m・短軸3.0mを測り、長軸方向はN-30°-Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cmを測る。床面はローム層中に構築され、平坦である。炉跡および周溝は調査範囲内において検出されなかった。

ピットは2個検出された。P2は住居内側にやや傾斜しており、出入口施設とも考えられるが、P1の性格が不明瞭である。いずれにせよ部分調査のため確認はない。

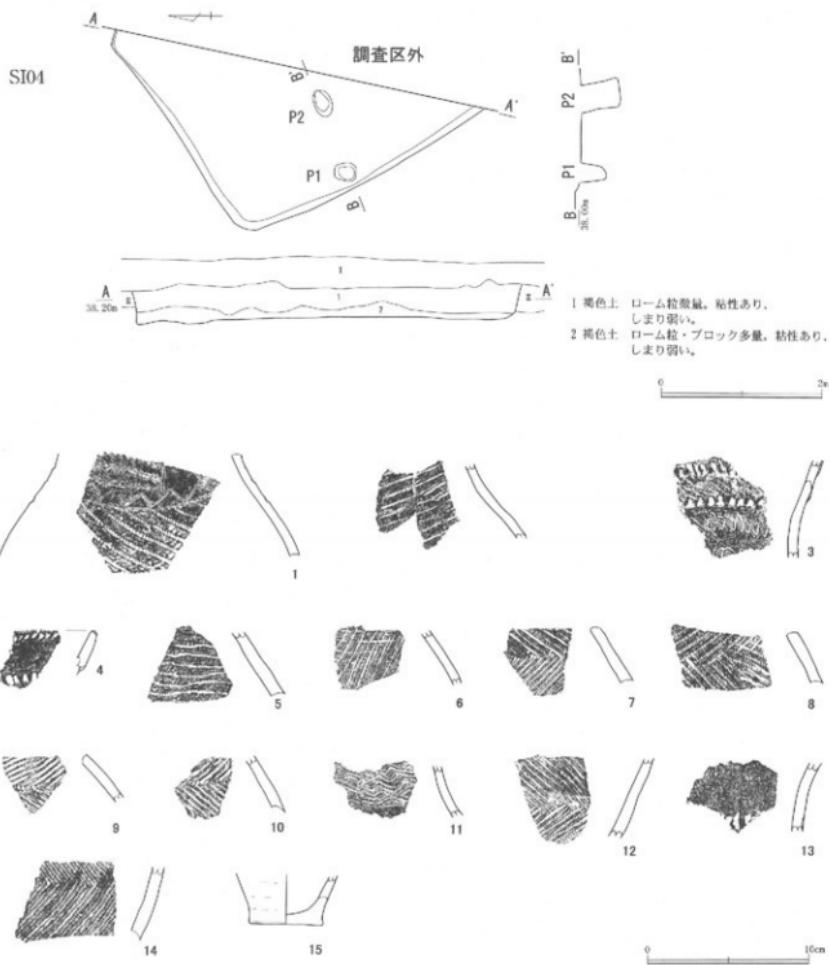
遺物は覆土中を中心に出土しているが、30点に満たない。いずれも散在的な出土であり、一括集中といった出土様相は見られなかった。

SI05 (第9図)

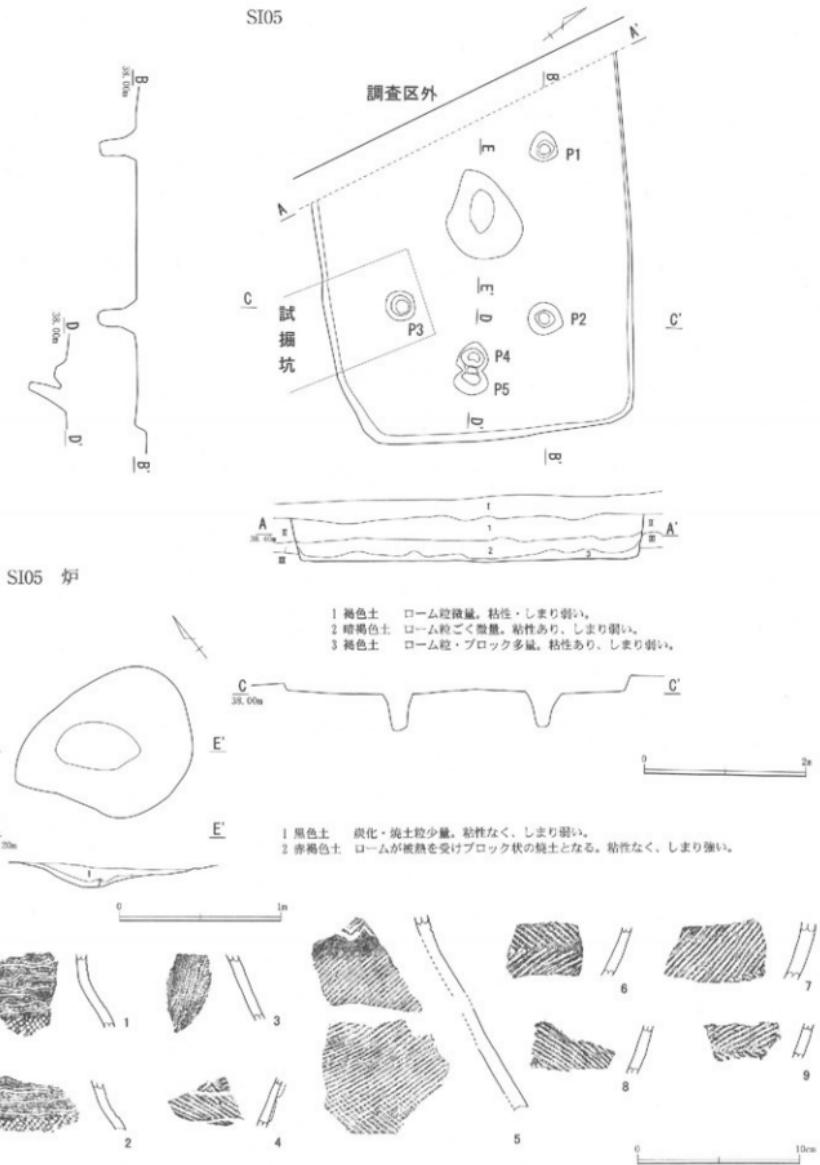
調査区中央、L-4グリッドを中心に位置し、標高は38.2mを測る。西側壁は調査区外に出、南側壁は一部は試掘坑により欠失する。平面形は隅丸長方形を呈すると思われ、規模は長軸は現存値で4.6m・短軸3.8mを測る。長軸方向はN-53°-Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は52cm前後を測る。床面はローム層中に構築され、平坦で堅い。周溝は調査範囲内においては検出されなかった。

炉跡は地床炉で、長軸線上の中央やや西寄りにあり、長径1.1m・短径0.9m・深さ0.13mの梢円形を呈する。ピットは5個検出され、主柱穴はP1～3である。P5は住居内側へ約30～35°の傾斜を有していることから梯子穴のような出入口施設と考えられる。

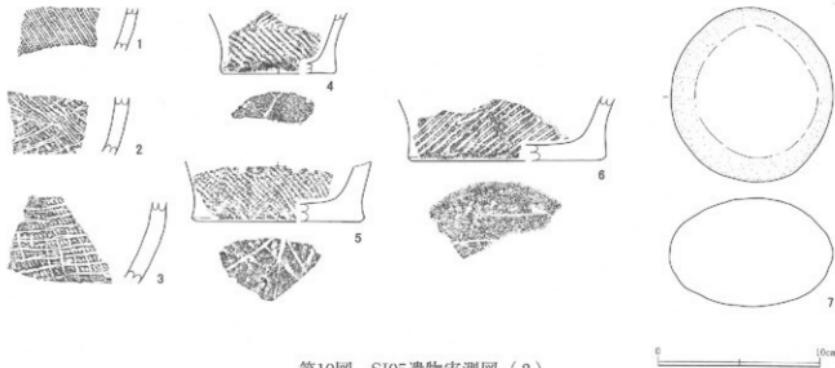
遺物は炉周辺の床面から5点出土した以外は、すべて覆土中からである。SI04と同様に散在的であり、まとまった出土状況は見られなかった。



第8図 SI04 実測図・遺物実測図



第9図 SI05 実測図・遺物実測図（1）



第10図 SI05遺物実測図（2）

第3表 觀察表（1）

遺構名	遺物番号	鉢器番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SI04	一括	8-1	13-1	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部～胴部の破片。肩部は彫描文で縦位に区画され、区画内を横位の彫描波状文が施されている。肩部と肩部との境は彫描山形文と彫描文が施され、胴部には捺文系が施される。肩部外面には黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通 外面：黒褐色 内面：暗褐色	
	一括	8-2	13-2	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。捺文系が施されている。外面に黒色物質が付着している。	小砂粒・白色針状 物質微量	普通 黒褐色	
	一括	8-3	13-3	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部～頸部の破片。口縁部折り返し部分に刺突文をつけ、彫描波状文、刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通 黒褐色	
	一括	8-4	13-4	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。口縁部にキザミ目が施され、口縁部折り返し部分に刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	小砂粒・白色針状 物質・長石微量	普通 外面：暗褐色 内面：明赤褐色	
	一括	8-5	13-5	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。捺文系が施されている。	微砂粒中量・石英 少量	普通 外面：褐色 内面：にぶい 黄褐色	
	一括	8-6	13-6	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。付加条2種（付加1条）の縫合部が一部格子状に施されている。	微砂粒微量	普通 黒褐色	
	一括	8-7	13-7	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。付加条2種（付加1条）の羽状構文が施されている。	微砂粒・石英微量	普通 外面：褐色 内面：明赤褐色	
	一括	8-8	13-8	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。捺文系とrの羽状構文が施されている。内面に黒色物質が付着している。	小砂粒・長石多量	普通 暗褐色	
	一括	8-9	13-9	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。付加条2種（付加1条）の羽状構文が施されている。	微砂粒微量	普通 明赤褐色	
	一括	8-10	13-10	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。付加条2種（付加1条）の羽状構文が施されている。	微砂粒・石英多量	普通 外面：褐色 内面：明赤褐色	
	一括	8-11	13-11	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部の破片。不規則な彫描波状文が施されている。	小砂粒・長石少量	普通 外面：褐色 内面：にぶい 黄褐色	
	一括	8-12	13-12	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。付加条2種（付加1条）の羽状構文が施されている。	微砂粒微量	普通 明黄褐色	
	一括	8-13	13-13	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部の破片。下縁にR縫文？が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒・長石微量	普通 赤褐色	
	一括	8-14	13-14	弥生土器	壺	-	-	-	壺の肩部破片。捺文1とrの羽状構文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通 外面：にぶい 黄褐色 内面：褐色	
	一括	8-15	13-15	弥生土器	壺	-	-	-	壺部～胴部の破片。胴部は急角度で立ち上がり、底部はヘラナゲ後ナダ。胴部から底部にかけて黒斑あり。	微砂粒・石英多量、白色針状物質 少量	普通 外面：暗褐色 内面：赤褐色	

第4表 観察表(2)

遺物名	遺物番号	神岡番号	回収番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SII5	一括	9-1	13-16	弥生土器	壺	-	-	-	壺部～肩部は破片。瓶部には不規則な網状波状文が施され、肩部にはLR繩文が横位に施されている。底部に一部黒色物質が付着している。	微砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	9-2	13-17	弥生土器	壺	-	-	-	壺部～肩部は破片。頂部には不規則な網状波状文が施され、肩部にはLR繩文が横位に施されている。	小砂粒中量・石英少量	普通	暗褐色 外面：褐色
	一括	9-3	13-18	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。折り返し部分に「壺系」の繩文が施されている。内面に黒色物質が付着している。	微砂粒・石英・雲母微量	普通	褐色
	一括	9-4	13-19	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。折り返し部分に「壺系」の繩文が施されている。外面上に黒色物質が付着している。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	9-5	13-20	弥生土器	壺	-	-	-	上部に横位の網状波状文を施し、その下に付加条2種(付加1条)の羽状繩文が施されている。一部墨なり、慾子状をなす。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	9-6	13-21	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の羽状繩文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	褐色
	一括	9-7	13-22	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の羽状繩文が施されている。	大砂粒少量・中砂粒・石英中量	普通	内面：赤褐色 外面：褐色
	一括	9-8	13-23	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の繩文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	暗褐色
	一括	9-9	13-24	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の羽状繩文が施されている。	微砂粒微量	普通	赤褐色
	一括	10-1	13-25	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の繩文が施されている。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	10-2	13-26	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の繩文が「無筋」の付加繩文とともに格子状に施されている。外面上に墨斑あり。	微砂粒微量	普通	暗褐色
	一括	10-3	13-27	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の繩文が格子状に施されている。	小砂粒中量	普通	暗褐色
	一括	10-4	13-28	弥生土器	壺	-	-	-	壺の底部～胴部破片。胴部に繩文RLが施され、底部に木炭痕が明瞭に残っている。	微砂粒微量	普通	外面：褐色 内面：黄褐色
	一括	10-5	13-29	弥生土器	壺	-	-	-	壺の底部～胴部破片。胴部に繩文RLが施され、底部に木炭痕が残り、崩れれている。内面に黒色物質が付着している。	微砂粒微量	普通	褐色
	一括	10-6	13-30	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。付加条2種(付加1条)の繩文が施されている。底部に木炭痕が残る。	小砂粒・石英中量	普通	暗褐色
	一括	10-7	13-31	石器	磨石	-	-	-	長さ10.8cm、幅10cm、厚さ6.8cm。円錐を素材とした、扁円形で厚みを持つ人の顎の磨石。両面とも半高さとりたてて挫痕は認められない。			

PG01(第11図)

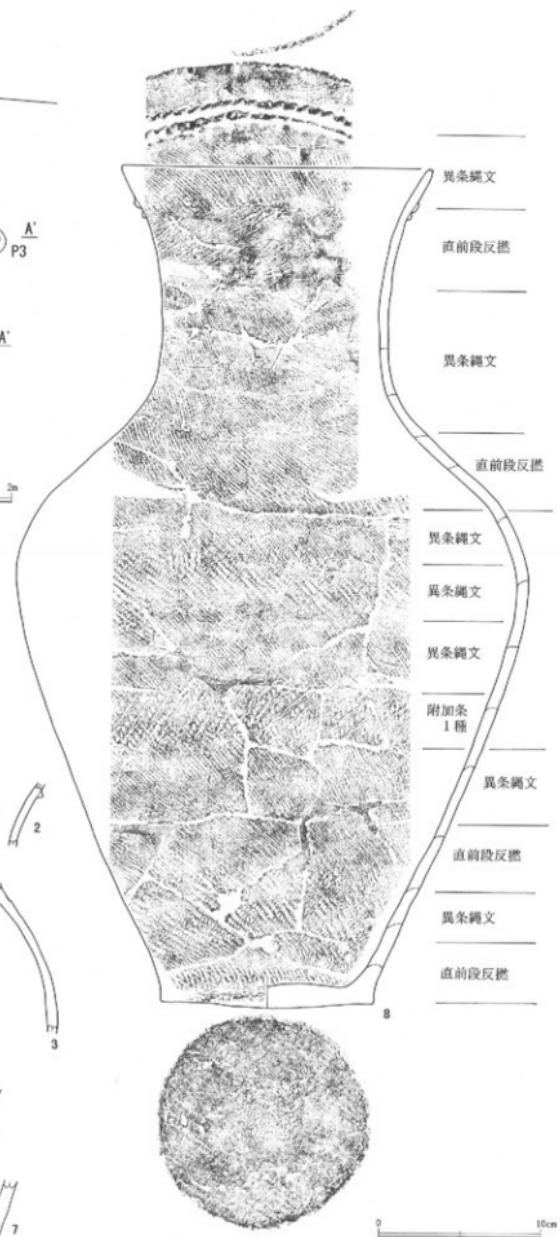
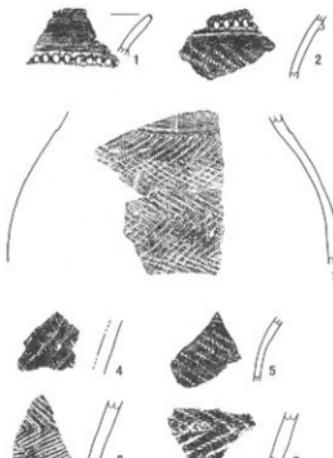
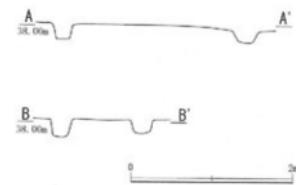
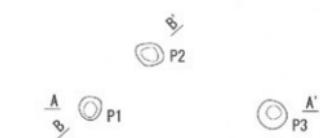
調査区中央、J-4グリッド周辺において、3本のピットを検出した。これらを当該期の帰属とした理由は、ピット内に遺物が出土している点、各ピットの覆土が住居址覆土と共通している点から判断したものである。調査中には、ピットの配列を含めて、住居跡の存在も考慮し周辺を精査したが、床面と覺しき硬化面や焼土痕、礫面となるような掘込を確認することはできなかった。

いずれも平面は不整円形を呈し、径25~35cm・深さ15~20cmを測る。覆土は単層である。

遺物はP2覆土巾から出土した。

PG01

調査区外



第11図 PG01実測図・遺物実測図

第5表 観察表(3)

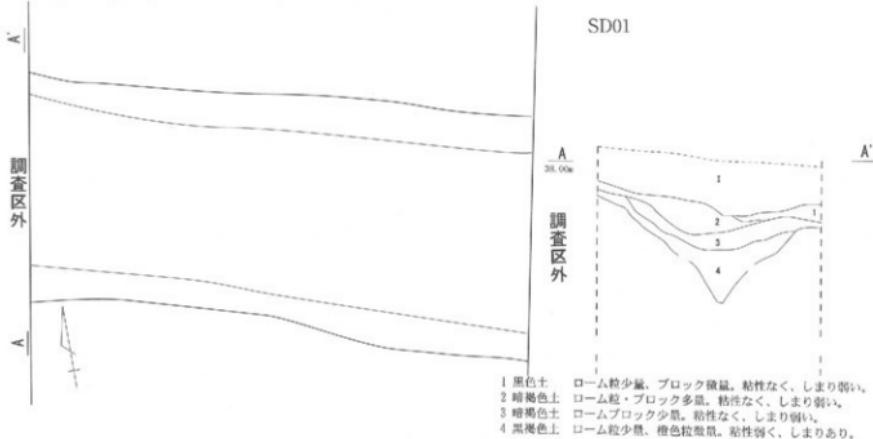
遺構名	遺物番号	辨別番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	粘土	焼成	色調
PG01	一括	11-1	13-32	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。口部にヘラ状工具によるキザミ目が施されている。肩部との間に細い隆脊が残され、刺突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微鉄粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-2	13-33	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口縁部破片。肩部との間に細い隆脊が残され、刺突文が施され、肩部には斜位の捲系の縄文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微鉄粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-3	13-34	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胸部破片。上部は継位に捲文で区画され、横位の捲文で区画内を施している。肩部は捲系と1の羽状捲文が施されている。外面に黒色物質が付着している。内面にヘラ状工具痕が明顯に残る。	微鉄粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-4	13-35	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胸部破片。筒系1の縄文が施されている。表面に擦痕が残る。	小砂粒・石英中量	普通	赤褐色
	一括	11-5	13-36	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胸部破片。筒系1の縄文が施されている。表面に擦痕が残る。	微鉄粒微量	普通	暗褐色
	一括	11-6	13-37	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胸部破片。付加条2種(付加条1)の羽状捲文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	外側:暗褐色 内側:橙色
	一括	11-7	13-38	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胸部破片。筒系1と1の羽状捲文が施されている。	小砂粒・石英中量	普通	黄褐色
	一括	11-8	14-1	弥生土器	壺	19	13	52	大型壺の完形品。口唇に捲文原体の圧痕で刻みを入れ、ロム線下に指壓痕の筋土縫2条貼付け。そのままから底部まで筋の異なる各種の捲文原体(筒条付加条)を回転施した捲文帯が12段に渡り重疊。底面には布目压痕と移痕が確認される。束中根式?			

SD01(第12図)

調査区北側、R-5グリッドに位置し、標高は37.0mを測る。北側へとしだいに傾斜していく地形に沿って、概ね東西方向にのびるものと考えられる。

調査は著しい湧水の為、溝底まで到らなかったが、溝の断面形態は「V」ないし「逆台形」状を呈すると思われる。確認面での溝幅1.9~2.2m・深さ(1.0~1.2)mを測る。

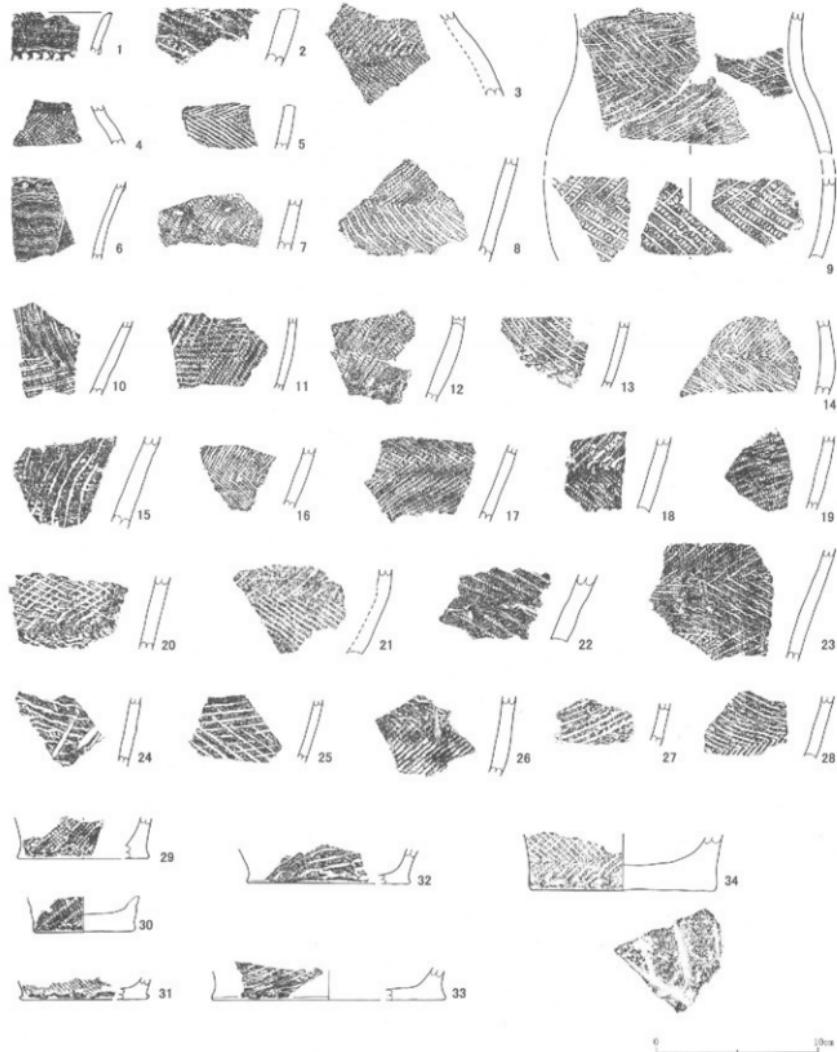
遺物は2層より出土したが、小片のため図示できるものはない。



第12図 SD01実測図

遺構外遺物

弥生時代に属する遺構外の遺物は調査区域内において散漫な出土状況であった。当時期の遺構が位置する調査区中央部周辺においてややまとまるものの、完形に近い遺物はなく、小破片が大多数を占める。



第13図 遺構外遺物実測図

第6表 觀察表(4)

遺物名	遺物番号	博岡番号	國版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	粘土	施成	色調
遺構外	一括	13-1	15-1	弥生土器	壺	-	-	-	壺の口部破片。口部にキサミ目が施されている。 側部との境に黒い縦彫が施され軸突文が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-2	15-2	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。斜位の撲糸の縦彫が施されている。内面は剥落している。表面の調整は丁寧ではなく凹凸がある。	小砂粒・石英・長石多量	普通	外側：暗褐色 内面：褐色
	一括	13-3	15-3	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。内面は剥落している。	小砂粒・石英・長石多量	普通	褐色
	一括	13-4	15-4	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	褐色
	一括	13-5	15-5	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。一部格子状をなす。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	13-6	15-6	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。付加条2種(付加1条)の羽状縦彫が施されている。一部格子状をなす。外面に黒斑あり。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-7	15-7	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。付加条2種(付加2条)の羽状縦彫が施されている。内面に黒斑と粘土被膜あり。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-8	15-8	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。内面は剥落している。	中砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-9	15-9	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とI付加条2種(付加1条)の羽状縦彫が施されている。一部格子状をなす。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-10	15-10	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。付加条2種(付加1条)の羽状縦彫が施されている。	微砂粒・白色物質少量	普通	褐色
	一括	13-11	15-11	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	褐色
	一括	13-12	15-12	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。付加条2種(付加2条)の縦彫文が施されている。内外面に黒斑あり。	大砂粒・石英多量	普通	暗褐色
	一括	13-13	15-13	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの縦彫文が格子状に施されている。内面は剥落している。	微砂粒少量	普通	外側：暗褐色 内面：褐色
	一括	13-14	15-14	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。内面はビヒがあり、もろくなっている。	中砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-15	15-15	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。斜位の撲糸の縦彫が施されている。内面にヘラナデ痕残す。	小砂粒・石英少量	普通	褐色
	一括	13-16	15-16	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。表面は削落し、格子状をなす。	小砂粒・石英少量	普通	暗褐色
	一括	13-17	15-17	弥生土器	壺	-	-	-	壺の頂部破片。横彫文で縱位に区画して、区内に横段の横彫波状文を、口縁部折り返し部分に羽突文を施す。	微砂粒少量	普通	褐色
	一括	13-18	15-18	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。表面は削落してももろくなっている。	微砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-19	15-19	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。斜位の撲糸の縦彫が施されている。表面は削落してももろくなっている。	小砂粒少量	普通	暗褐色
	一括	13-20	15-20	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの縦彫文が格子状に施されている。内面は削落している。表面のみあり。	大砂粒・石英多量	普通	赤褐色
	一括	13-21	15-21	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。撲糸とIの羽状縦彫が施されている。外側は削落し、内面は削落している。	小砂粒・石英・長石多量	普通	褐色
	一括	13-22	15-22	弥生土器	壺	-	-	-	壺の脇部破片。斜位の撲糸の縦彫が施されている。内面は削落している。表面の調整は丁寧ではなく凹凸がある。	小砂粒・石英・長石多量	普通	褐色

第7表 観察表(5)

遺構名	遺物番号	探査番号	図版番号	種別	器種	L1径	器高	底径	特徴	鉢土	焼成	色調
遺構外	一括	13-23	15-23	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撫糸と「の羽状縞文」が施されている。	微砂粒・長石少量	普通	暗褐色
	一括	13-24	15-24	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。「撫糸」と「無筋」と「の羽状縞文」が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	外側：暗褐色 内面：赤褐色
	一括	13-25	15-25	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。撫糸と「の縞文」が格子状に施されている。内面は剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	黄褐色
	一括	13-26	15-26	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。「撫糸」と「無筋」と「の羽状縞文」が施されている。外面に黒色物質が付着している。	微砂粒少量	普通	外側：暗褐色 内面：赤褐色
	一括	13-27	15-27	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撫糸の縞文が施されている。表面は磨耗してもらくなっている。	小砂粒・石英少量	不良	白色
	一括	13-28	15-28	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。「撫糸」と「無筋」と「の羽状縞文」が施されている。内面は剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	黄褐色
	一括	13-29	15-29	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部破片。斜位の撫糸の縞文が施されている。底部には布目住瓦が残り、内面は剥落している。	小砂粒・石英多量	普通	橙色
	一括	13-30	15-30	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。底部には斜位の撫糸の縞文が施されている。底部は急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-31	15-31	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。底部には横位の撫糸RLが施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。底部～胴部の調整が丁寧ではなく、粘土が詰き付いたままである。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-32	15-32	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。底部には斜位の撫糸の縞文が施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-33	15-33	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。底部には付加名2種(付加1条)の縞文が施されている。底部は薄く、急角度で立ち上がる。	微砂粒少量	普通	黄褐色
	一括	13-34	15-34	弥生土器	壺	-	-	-	壺の胴部～底部破片。底部には撫糸と「の羽状縞文」が施され、底部には木葉痕が明瞭に残る。	大砂粒・石英多量	普通	褐色

3 古墳時代

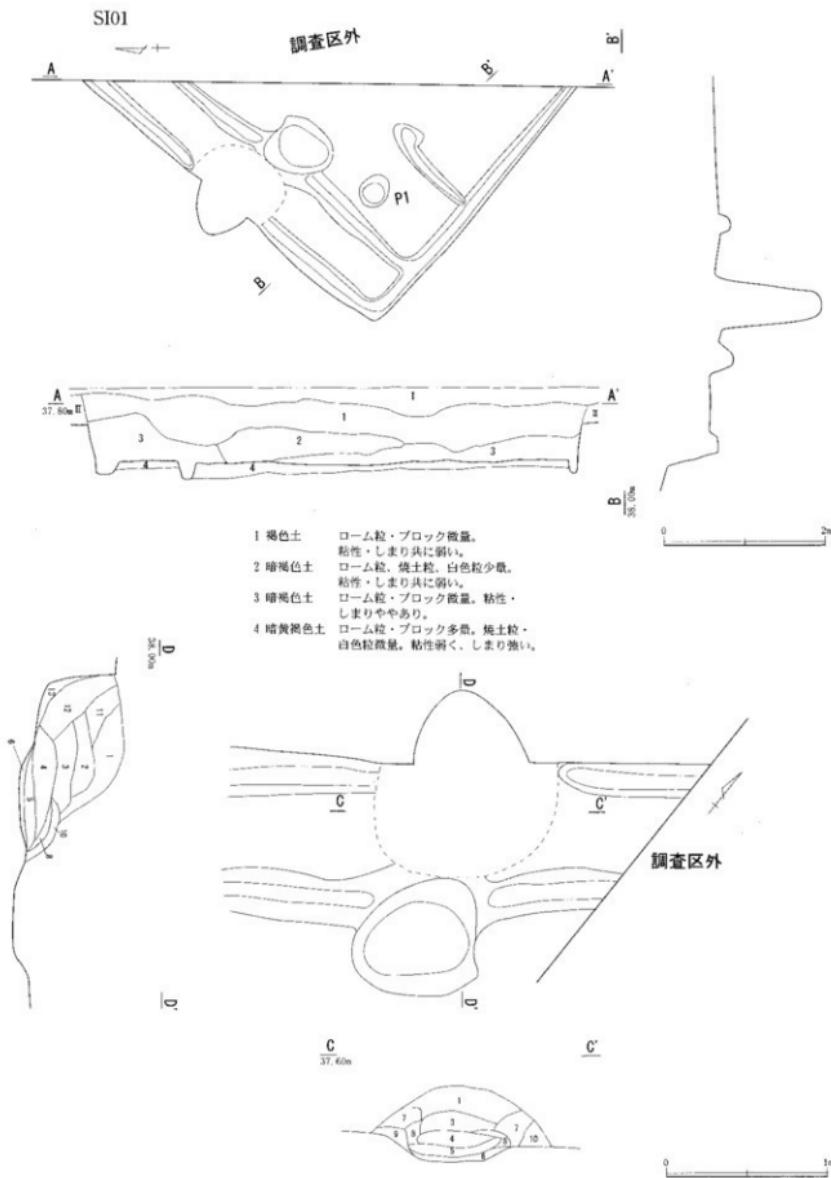
SI01 (第14図)

調査区南側、G-3グリッドを中心に位置し、標高は37.6mを測る。本遺構の大部分、東側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。この住居は建替えが行われており、古い住居の西辺側を0.6mほど拡張し、カマドを構築している。したがって、調査範囲内での規模は旧住居跡が3×3.8m、新住居跡が4×4.5mの二辺壁が確認されている。主軸方向はN-39°-Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは平均35cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝は幅12~24cm、深さ8~16cmで調査範囲内では全周している。

ピットは主柱穴が1個検出され、その南側に幅13~18cm、深さ8cmの間仕切り状の溝が存在する。

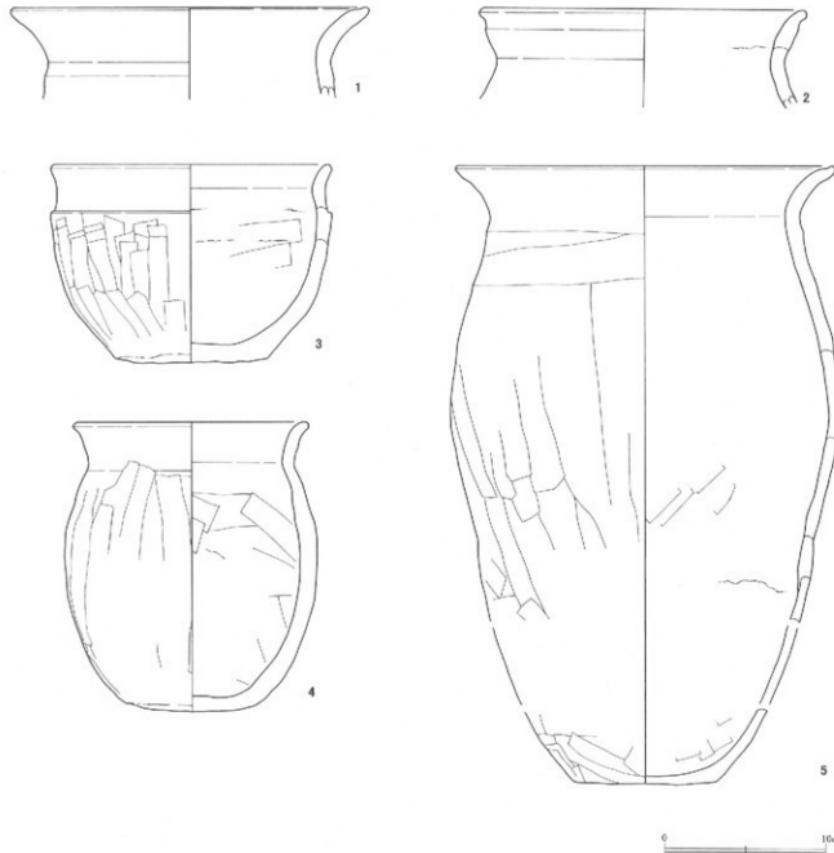
遺物は床面・カマド周辺および覆土上層から出土した。床直上面のまとまった遺物としてはカマド右袖前面から復元可能の個体が出土している。しかし本遺構に伴う遺物の大半は覆土上層から中層にまとまって出土したものであり、投げ込み・流れ込みに扱るものであることが想定される。下層からの出土点数は顕著ではない。

カマドは北壁面に構築され、長さ1.2m・幅1.1mを測る。遺存状況は袖部が崩落して残存していないかったもの、比較的良好である。図のカマド破線範囲は掘り方で灰白色粘土が貼られている。なお、断面図A-A'では東側の切合面は床面に段差が認められないが、カマド西側では断面B-B'にみると、壁際で10cm程の段差が認められる。これを棚状施設と解すると、住居跡は拡張した結果ではなく単独住居の可能性がある。

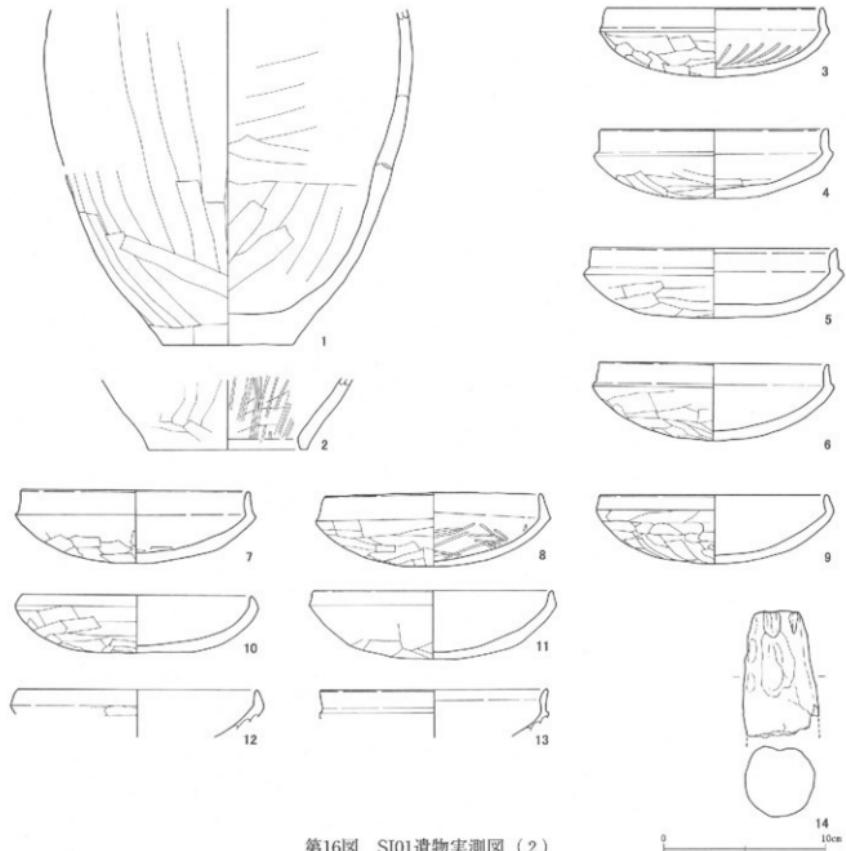


第14図 SI01実測図

- 1 緑褐色土 や2~4 mmの白色粒少量。粘性弱く、しまりあり。
 2 緑褐色土 1に近似するが、や5 mmの褐色粒少量。粘性弱く、しまりあり。
 3 墓褐色土 2に近似するが、しまりが強まる。
 4 灰褐色土 燃土・粘土粒多量、炭化粒少量。粘性・しまりなし。
 5 赤褐色土 燃土・粘土粒多量、炭化粒少量。粘性・しまり共に弱い。
 6 棕褐色土 燃土・被熱融少量、ロームブロック多量。粘性弱く、しまりなし。
 7 暗褐色土 や2~5 mmの黒色粒・粘土粒・燃土微量、ロームブロック少量。粘性・しまりあり。
 8 暗茶褐色土 燃土・粘土粒少量。粘性あり、しまり弱い。
 9 暗褐色土 燃土粒・ロームブロック少量。粘性あり、しまり強い。
 10 暗茶褐色土 7に近似するが、燃土は含まれず、ロームブロック少量。粘性・しまりあり。
 11 暗褐色土 や5 mmの黒色粒少量、燃土・粘土粒微量。粘性なく、しまりあり。
 12 暗褐色土 燃土・粘土粒少量。粘性・しまりなし。
 13 黑褐色土 12に比ロームブロックが含まれる。粘性・しまりややあり。



第15図 SI01遺物実測図（1）



第16図 SI01遺物実測図（2）

第8表 観察表（6）

遺構名	遺物番号	跡図番号	国版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SI01	一括	15-1	15-35	土師器	甕	(21.6)	(5.5)	-	口縁部横ナデ。	小移粒・金雲母少量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-2	15-36	土師器	甕	(19.6)	(6.0)	-	口縁部横ナデ。内面粘土謫痕あり。	小移粒・金雲母少量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-3	15-37	土師器	鉢	(17.2)	(12.1)	(9.4)	口縁部横ナデ。外面は腹位のヘラ削り。底部外側ヘラ削り。内面はヘラナデ。カマド粘土付着。	砂粒・金雲母中量。	外曲:明赤褐色 普通色 内面:黄褐色	
	一括	15-4	15-38	土師器	甕	(14.4)	17.7	8.0	口縁部横ナデ。外面は腹位のヘラ削り。底部外側ヘラ削り。内面はヘラナデ。カマド粘土付着。	砂粒少量。	普通	にぶい黄褐色
	一括	15-5	16-1	土師器	甕	(23.2)	-	(8.4)	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り後、ヘラナデ。内面はヘラナデ。口縁部、胴部に一部黒斑あり。	砂粒少量、金雲母多量。	胴部外面:にぶい黄褐色 普通 口縁部:内面:明黄褐色	
	一括	16-1	16-2	土師器	甕		8.0	(20.5)	外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。胴部外面に黒斑あり。	砂粒中量。	普通	にぶい黄褐色

第9表 観察表(7)

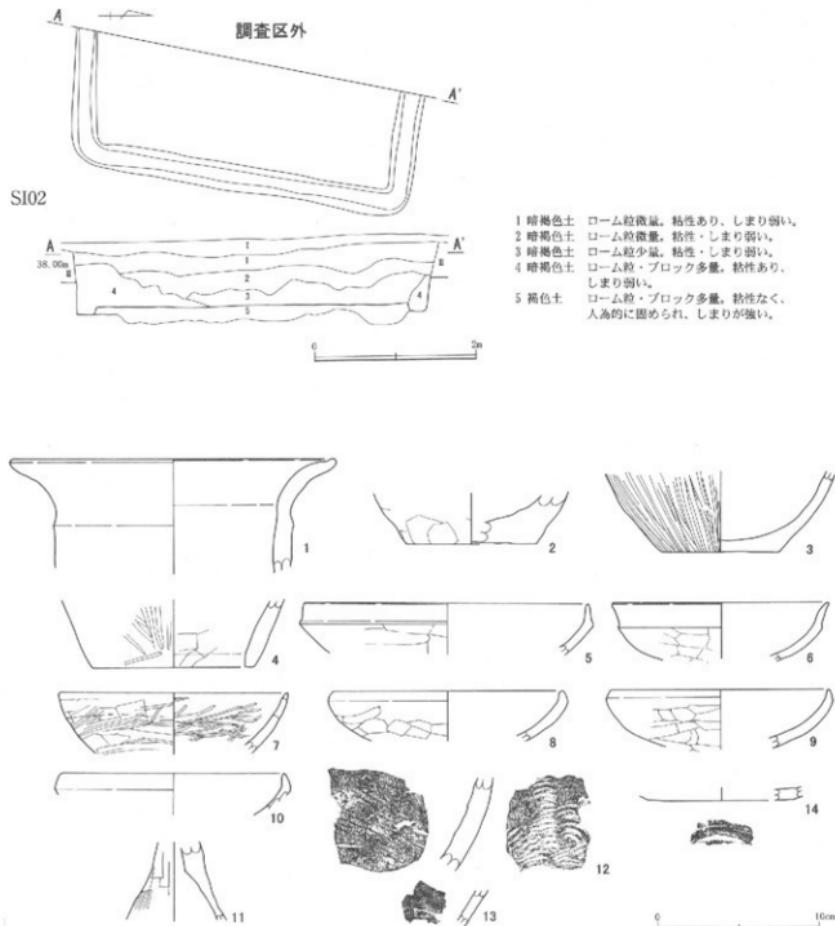
遺構名	遺物番号	鉢形図番号	実版番号	種別	部種	L径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SI01	一括	16-2	16-3	土師器	甌	-	(4.3)	(9.7)	外面はヘラ削り、内面はヘラ削り後、ヘラ磨き。孔部はヘラ削り。	砂粒少量	普通	明赤褐色
	一括	16-3	16-4	土師器	甌	(13.2)	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面は放射状硝文。外面底部に黒斑あり。内面黒色処理。	砂粒・金雲母少量	普通	外面：黄褐色 内面：赤褐色
	一括	16-4	16-5	土師器	甌	14.1	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。口縁部内外面にタール状物質付着。	砂粒・金雲母中量	普通	橙色
	一括	16-5	16-6	土師器	甌	(15.0)	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、底部に一部黒斑あり。内面はナデ。	砂粒中量・長石・赤色スコリア・白色針状物質少量	普通	明赤褐色
	一括	16-6	16-7	土師器	甌	14.0	4.75	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り。口縁部内外面にタール状物質付着。外面底下部に一部黒斑あり。	砂粒少量・金雲母多量	普通	橙色
	一括	16-7	16-8	土師器	甌	14.0	4.55	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。体部・口縁部内外面にタール状物質付着。	砂粒中量・金雲母多量	普通	明黄褐色
	一括	16-8	16-9	土師器	甌	13.25	4.5	-	外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒少量・金雲母多量	普通	明褐色
	一括	16-9	16-10	土師器	甌	13.9	4.2	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り。口縁部内外面にタール状物質付着。	小砂粒・金雲母少量	普通	橙色
	一括	16-10	16-11	土師器	甌	(14.0)	3.5	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はナデ。内面黒色処理。	砂粒少量・金雲母中量	普通	外面：明褐色 内面：赤褐色
	一括	16-11	16-12	土師器	甌	(14.5)	4.2	-	口縁部横ナデ。内面黒色処理。外面はヘラ削り。	小砂粒・金雲母少量	普通	褐色
	一括	16-12	16-13	土師器	甌	(14.5)	(2.9)	-	口縁部横ナデ。内面はナデ。内面黒色処理。外面は削部剥落。	小砂粒・金雲母少量	普通	橙色
	一括	16-13	16-14	土師器	甌	(14.0)	(2.9)	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、黒色処理。外面は削部剥落。	小砂粒・金雲母少量	普通	橙色
	一括	16-14	16-15	土製品	支脚				高さ(7.7)、幅4.7、厚さ4.3。指痕痕による整形痕が施者に残る。下端部欠損。	金雲母・黑色スコリア微量	にぶい黄褐色、一部赤褐色	
SI02	一括	17-1	16-16	土師器	甌	(17.0)	(7.1)	-	口縁部横ナデ。口縁部外面黒斑あり。内面ナデ。	金雲母多量	普通	にぶい黄色
	一括	17-2	16-17	土師器	甌	(17.2)	(3.1)	(8.0)	外面ヘラ削り。	小砂粒多量・金雲母・黑色スコリア微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	17-3	16-18	土師器	甌	(13.5)	(5.0)	7.0	外面は頭部ヘラ削き、底部はナデ後、軽いヘラ磨き。内面はナデ。外面に焦付着。	砂粒中量・金雲母微量	普通	内面：一部赤褐色
	一括	17-4	16-19	土師器	甌	(16.8)	(4.2)	(10.0)	外面はヘラ削りの後、磨き、赤色彩文。内面ヘラ削り。	小砂粒・金雲母微量	普通	赤褐色
	一括	17-5	16-20	土師器	甌	(13.1)	(3.7)	-	口縁部横ナデ。外面は体部ヘラ削り、内面黒色処理。	小砂粒微量	普通	橙色
	一括	17-6	16-21	土師器	甌	(8.9)	(13.1)	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削りの後ナデ。内面は黒色処理。	金雲母少量	普通	にぶい黄褐色
	一括	17-7	16-22	土師器	甌	(19.8)	(3.7)	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削りの後、部分的な磨き。内面はヘラ磨き。	赤色スコリア・金雲母微量	普通	外側：灰青褐色 内面：橙色
	一括	17-8	16-23	土師器	甌	-	(3.1)	-	口縁部横ナデ。外面はヘラ削り、内面はナデ。内面はヘラ削り。	小砂粒少量・金雲母微量	普通	外側：赤褐色 内面：暗褐色
	一括	17-9	16-24	土師器	甌	(13.3)	(3.6)	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、黒色処理。外面はヘラ削り。	小砂粒・金雲母微量	普通	赤褐色
	一括	17-10	16-25	土師器	甌	-	(2.55)	-	口縁部横ナデ。外面は剥落している。内面黒色処理。	金雲母少量	普通	橙色
	一括	17-11	16-26	土師器	高甌	-	(4.8)	-	外面ヘラナデ、一部ヘラ磨き。黒斑あり。内面指ナデ。	小砂粒少量・金雲母微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	17-12	17-1	須恵器	甌	-	-	-	内面は同心円の当て具痕、外面は平行叩き目。自然輪付着。	大砂粒微量・小砂粒少量	普通	暗灰色
	一括	17-13	17-2	須恵器	甌	-	-	-	外面横ナデ。	砂粒小量	普通	白色
	一括	17-14	17-3	須恵器	甌	-	(0.8)	-	底部切り離し後、ヘラナデ。	小砂粒小量	普通	灰色

SI02 (第17図)

調査区南側、H-3グリッドに位置し、標高は37.7mを測る。本遺構の西側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は $4.3 \times (1.6)$ mを測り、主軸方向は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは30cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝は幅22~30cm・深さ10cmで調査範囲内では全周する。

カマドないし炉、ピットは検出されなかった。

遺物は覆土下層から5点以外は上層から出土したものである。



第17図 SI02実測図・遺物実測図

SI06 (第18・19図)

調査区北側、P-5グリッドを中心に位置し、標高は38.3mを測る。東西両側は調査区外となる。P-5グリッド周辺は後世の開発によりローム層上面まで削平されていた為、本遺構の掘込は浅い。特に北東側ではプラン確認が不可能であった。

平面形は方形を呈すると思われ、調査範囲内の規模は7.3×(6.6) mを測る。主軸方向はN-25°-Wをとる。床面はローム層中に構築され、平坦である。周溝は幅12~24cm・深さ6~10cmで住居面半部で検出されている。

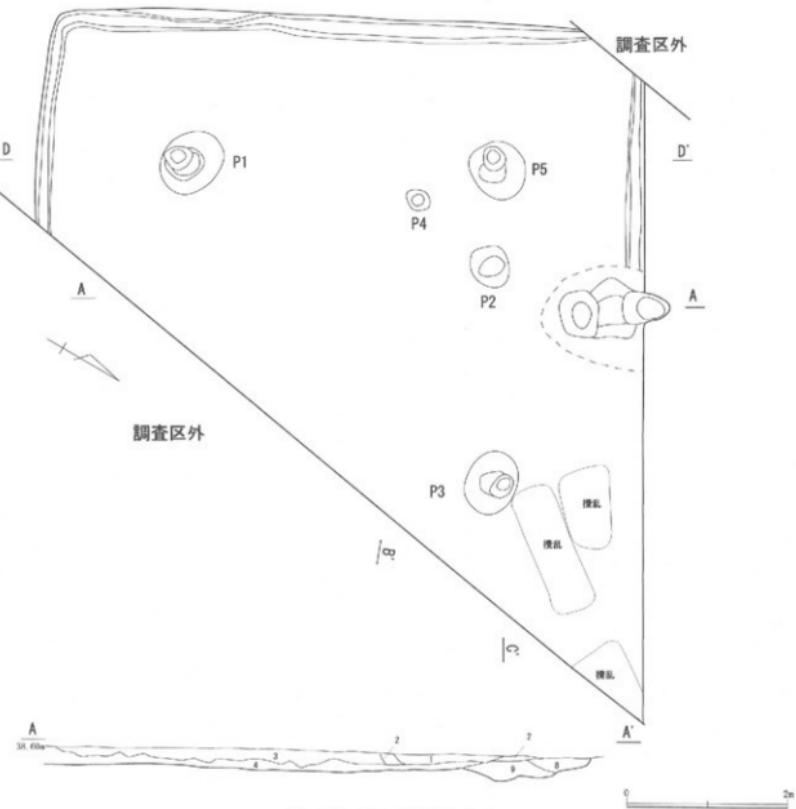
ピットは5個検出された。主柱穴はP1・3・5で、いずれも深さ1m前後あり、しっかりしたものである。P2はすり鉢状を呈する浅いピットである。

遺物は覆土の遺存が悪かったために、覆土内には遺物が少ないとされた結果となった。床直上面・カマド周辺部・カマド崩落土中からややまとまって出土した。

カマドは北壁面に構築され、長さ1.2m、幅1.1mを測るが、遺存状況は悪い。

SI06

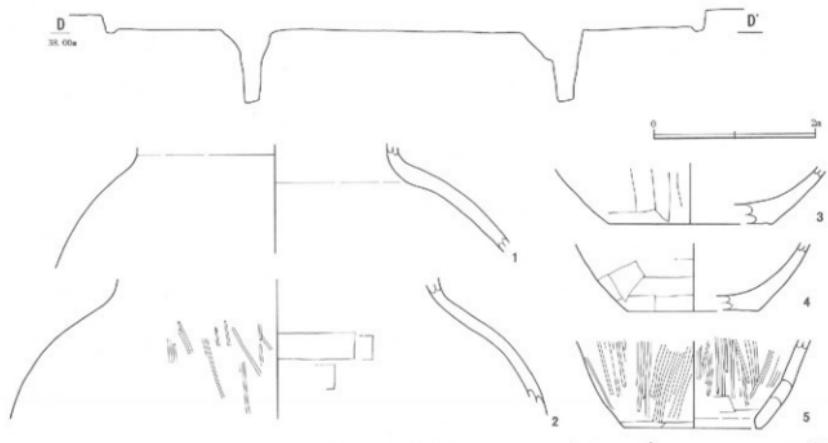
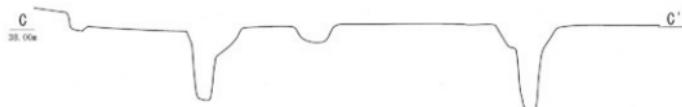
/ o | o



第18図 SI06実測図（1）



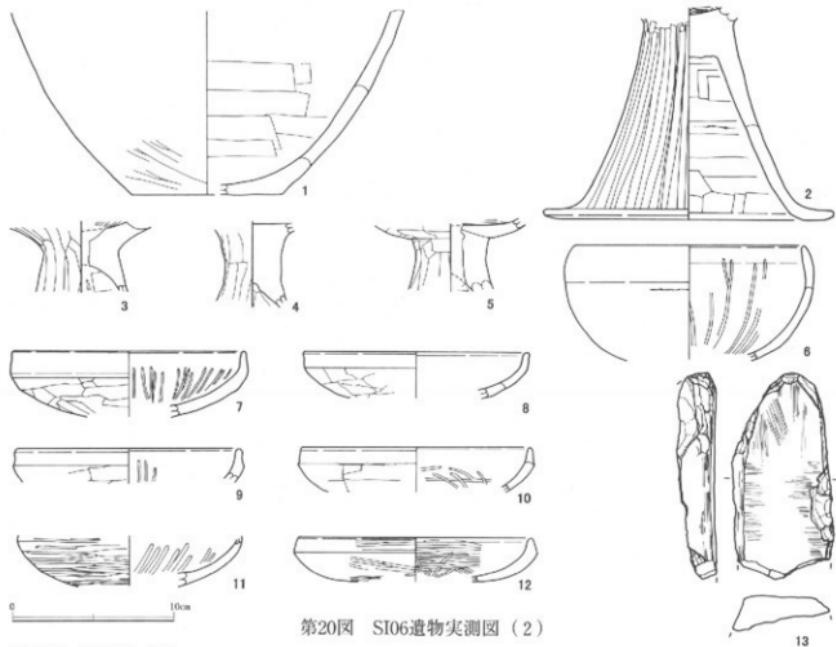
- 1 單褐色土 ローム粒少量。粘性なく、しまり非常に強い。(SI01 覆土)
- 2 緑色土 ローム粒少量。粘性あり、しまり強い。
- 3 棕色土 ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり弱い。
- 4 單黃褐色土 ローム粒・ブロック多量。粘性あり、しまり弱い。
- 5 單褐色土 ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり強い。
- 6 黒褐色土 ローム粒・ブロック少量。粘性あり、しまり弱い。
- 7 單黃褐色土 ローム粒・燒土粒・炭化粒微量。粘性なく、しまりあり。
- 8 黃灰色土 燃土粒・ブロック。白色粘土粒・ブロック多量。粘性なく、しまり強い。(窓覆土)
- 9 單黃褐色土 ローム粒・ブロック、燒土粒・ブロック少量。粘性・しまりあり。(窓覆土)



第19図 SI06実測図(2)・遺物実測図(1)

第10表 観察表(8)

遺構名	遺物番号	部	回数番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SI06	一括	19-1	17-4	土師器	壺	-	-	-	内外面ナデ調整。	砂粒やや多量。	普通	外面：黒色、内面：にぶい 黄褐色
	一括	19-2	17-5	土師器	壺	-			外面ナデ後、ヘラ削き。内面はヘラナデ。	砂粒中量、全表面 多量。	普通	明黄褐色
	一括	19-3	17-6	土師器	壺	-	(3.0)	(10.0)	外面は脚部・底部がヘラ削り、内面はナデ。	砂粒中量、全表面 少量。	普通	灰黄褐色
	一括	19-4	17-7	土師器	壺	-	(4.1)	(8.0)	外面は脚部・底部がヘラ削り、内面はナデ。	砂粒中量。	普通	暗褐色
	一括	19-5	17-8	土師器	瓶	-	(5.3)	(8.4)	口縁部削方向へラ削り。脚部内外面ヘラ削り 後、ヘラ磨き。	砂粒少量。	普通	外面：にぶい 黄褐色、内面：橙色



第20図 SI06遺物実測図（2）

第11表 観察表（9）

遺物名	遺物番号	詳細番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SI06	一括	20-1	17-9	土師器	壺	-	(11.3)	(9.2) 外面はヘラ削き、内面は横位のヘラナダ。	砂粒中量・金雲母少量。	普通	明褐色
	一括	20-2	17-10	土師器	高环	-	(13.0)	(17.8) 环部内面はヘラ削き後、黒色塗彩。脚部外面は縦位のヘラ削り、一部墨斑あり。内面はヘラ削り。脚部横ナダ。	大砂粒微量、砂粒少量、石英少量。	普通	にほい黄褐色 内面：明赤褐色
	一括	20-3	17-11	土師器	高环	-	(4.3)	-	砂粒・全雲母微量。	普通	にほい黄褐色
	一括	20-4	17-12	土師器	高环	-	(5.0)	-	砂粒中量・長石少量。	普通	明黄褐色
	一括	20-5	17-13	土師器	高环	-	(4.0)	-	砂粒中量・赤色スコリア少量。	普通	にほい黄褐色
	一括	20-6	17-14	土師器	壺	(14.2)	(7.0)	口縁部横ナダ、内面は放射状暗文、粘土斑痕あり。外面はヘラ削りながら磨耗し、粘土斑痕あり。	砂粒少量。	普通	にほい黄褐色
	一括	20-7	17-15	土師器	壺	(14.4)	(4.0)	口縁部横ナダ。内面は放射状暗文、黒斑あり。	砂粒少量。	普通	暗褐色
	一括	20-8	17-16	土師器	壺	(13.8)	(2.8)	口縁部横ナダ。内面はナダ、黒色処理？外面はヘラ削り。輪筋痕あり。	砂粒少量。	普通	明赤褐色
	一括	20-9	17-17	土師器	壺	(14.0)	(2.1)	口縁部横ナダ。外面はヘラ削り、内面はヘラ削き。	砂粒・赤色スコリア少量。	普通	明赤褐色
	一括	20-10	17-18	土師器	壺	(14.0)	(2.7)	口縁部横ナダ。外面はヘラ削り、内面はヘラ削き。口縁部にタール状物質付着。	砂粒・金雲母少量。	普通	にほい黄褐色 内面：にほい褐色
	一括	20-11	17-19	土師器	壺	-	(3.1)	-	砂粒少量、金雲母・石英多量。	普通	にほい褐色
	一括	20-12	17-20	土師器	壺	(14.2)	(2.7)	内面はヘラ削き後、放射状暗文、赤色塗彩。	砂粒・金雲母少量。	普通	明赤褐色
	一括	20-13	17-21	石器	砾石	-	-	高さ12.6cm、幅6.2cm、厚さ2.15cm。裏面は剥離、下端部欠損。粘岩質。			

4 古代

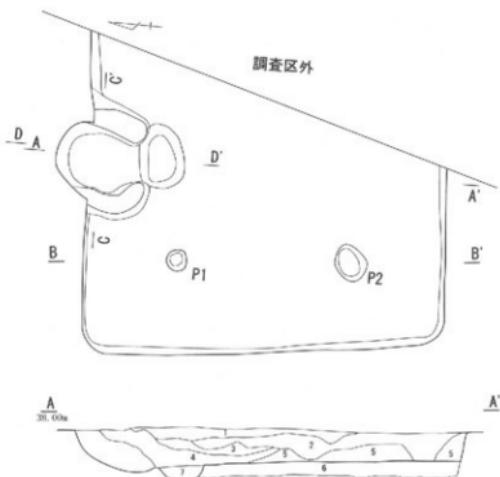
SI03 (第21・22図)

調査区南側、I-4グリッドを中心に位置し、標高は37.8mを測る。本遺構の東側は調査区外となる為、平面形は断言できないが方形を呈すると思われる。調査範囲内での規模は4.4×3.9mを測り、主軸方向はN-8°-Wをとる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは30cmを測る。床面はローム層中に貼床が構築され、平坦で堅く踏み締められている。周溝はない。ピットは2個検出され、いずれも主柱穴と思われる。

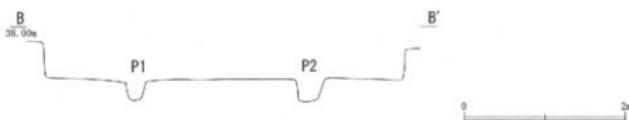
遺物は床面・カマド周辺および覆土上層から出土した。多くは覆土上層から中層にかけての出土である。

カマドは北壁面に構築され、長さ1.0m、幅1.3mを測る。遺存状況は良好である。

SI03

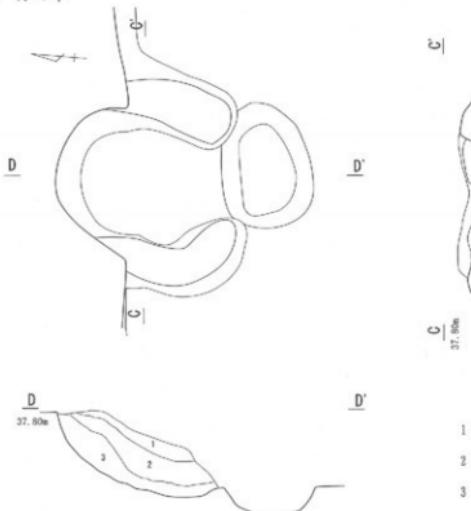


- | | |
|---------|--|
| 1 單褐色土 | ローム粒・堆土粒・白色粒微量。粘性・しまり弱い。 |
| 2 單褐色土 | ローム粒・焼土粒・白色粒微量。粘性あり・しまり弱い。 |
| 3 單黃褐色土 | ローム粒・ブロック・焼土粒・白色粘土ブロック・白色粒微量。粘性・しまり弱い。 |
| 4 單褐色土 | ローム粒・ブロック・焼土粒・白色粘土ブロック・白色粒微量。粘性・しまり弱い。 |
| 5 單黃褐色土 | ローム粒・ブロック・少量。粘性・しまり弱い。 |
| 6 純色土 | ローム粒・ブロック多量、粘性なく・人為的に固められ。しまりが強い。 |
| 7 單褐色土 | ローム粒・ブロック・少量。粘性・しまり弱い。 |

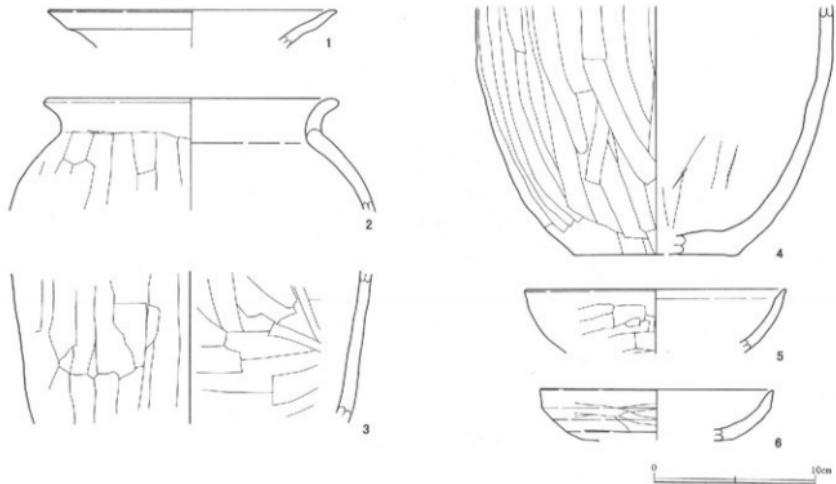


第21図 SI03実測図

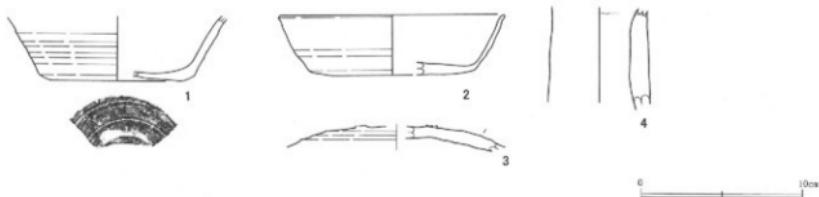
SI03 カマド



1 茶褐色土 シルト～砂質で、黄灰色粘土と茶褐色土が
混合。粘性なく、しまりがある。
2 赤褐色土 砂質で、茶褐色土中に多量の焼土がブロック
・粒状となる。粘性なく、しまり強い。
3 暗褐色土 粒子質で、密度が低い。粘性・しまりなし。



第22図 SI03実測図・遺物実測図（1）



第23図 SI03遺物実測図（2）

第12表 観察表（10）

遺構名	遺物番号	跡図番号	実版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特 徴	胎土	焼成	色調
SI03	一括	22-1	17-22	土師器	壺	(17.6)	(2.3)	-	口縁部は横ナデ。	金雲母微量	普通	暗褐色
	一括	22-2	17-23	土師器	甕	(18.0)	(6.9)	-	口縁部横ナデ。内面はナデ、外面は底位のヘラ削り。	砂粒中量	普通	褐色
	一括	22-3	17-24	土師器	壺	-	-	-	内面はヘラナデ、黒色処理。外面は底位のヘラ削り。	砂粒少量、金雲母多量	普通	明褐色
	一括	22-4	17-25	土師器	甕	-	(15.2)	10.0	外面削部・底部は底位のヘラ削り、外面に煤付着。内面はヘラナデ	大砂粒微量、中砂粒・金雲母中量	普通	内面：褐色、外側：にぶい黄褐色
	一括	22-5	18-1	土師器	壺	(16.0)	(3.75)	-	口縁部は横ナデ、黒色物質付着。内面はナデ、外面は底位のヘラ削り。	微砂粒微量	普通	にぶい黄褐色
	一括	22-6	18-2	土師器	壺	(14.2)	(3.1)	-	口縁部横ナデ。外面削部から底部はヘラ削り。	小砂粒少量	普通	褐色
	一括	23-1	18-3	須恵器	壺	-	(4.1)	(8.0)	底部ヘラ切り。外面削下部から底部は回転ヘラ削り。内面はクロ口を明瞭に残す。内面はナデ。	中砂粒微量、小砂粒少量、赤色スコリア少量	普通	灰黄色
カマド内	23-2	18-4	須恵器	壺	环	13.5	3.7	10.1	ヘラ切り後、外曲底部は回転ヘラ削り。体部はクロ口をやや残す。内面口縁部から底部は横ナデ、底部にタール状物質付着。	小砂粒・金雲母少量	不良	灰黄色
	一括	23-3	18-5	須恵器	壺	-	(1.65)	-	天井部回転ヘラ削り。細貼付け。	微砂粒微量	不良	にぶい褐色
	一括	23-4	18-6	須恵器	壺	-	(6.2)	-	内面に粘土擦痕あり。内外面自然触付着。	小砂粒少量	普通	灰白色

SB01（第24図）

調査区やや北側、N-5グリッド周辺に位置し、標高38.7mを測る。全容は不明であるが、2間×3間の倒柱式掘立柱建物と想定され、主軸方向はN-94°-Wをとる。

柱穴は11個検出し、調査範囲内での規模は梁行4.3m・桁行5.4m、柱間寸法は梁行2.2m・桁行1.7~1.9mである。柱穴形態は径35~45cmの不整円形を呈し、深さ30~40cmのものが多いがP5・7は50cmを測る。

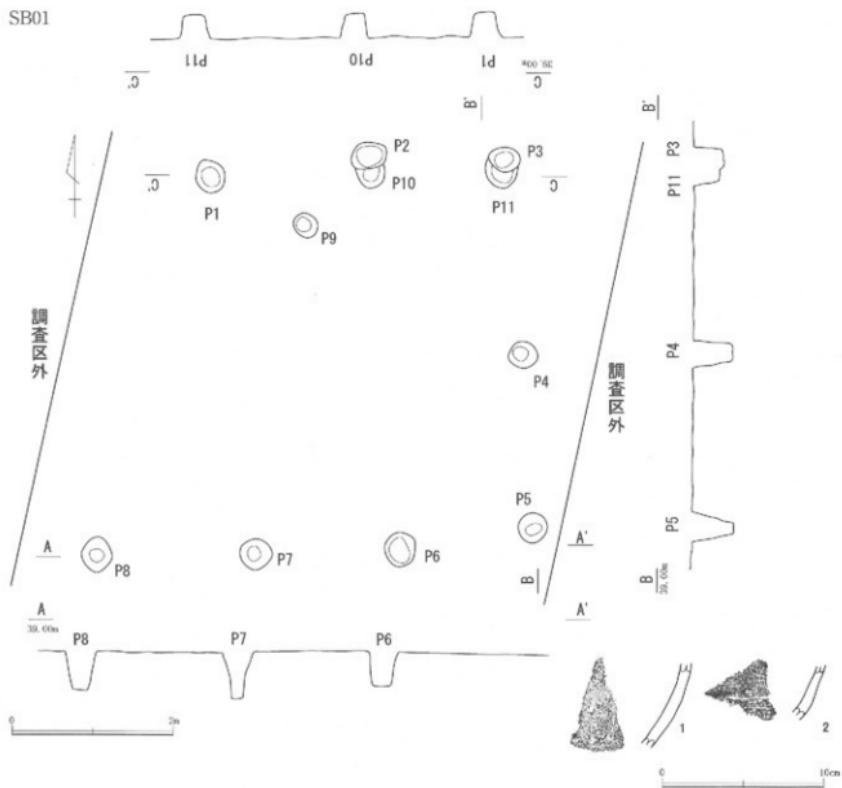
遺物は土師器、須恵器片でP2から出土した。

SB02（第25図）

調査区北側、O-5グリッドを中心に位置し、標高38.8mを測る。全容は不明であるが、2間×3間の倒柱式掘立柱建物と想定され、主軸方向はN-103°-Wをとる。

柱穴は17個検出し、調査範囲内での規模は梁行4.0m・桁行5.4m、柱間寸法は梁行2.2m・桁行1.7~1.9mである。柱穴形態は径35~50cmの不整円形を呈し、深さ30~40cmのものが多いがP5・8は60cm前後を測る。

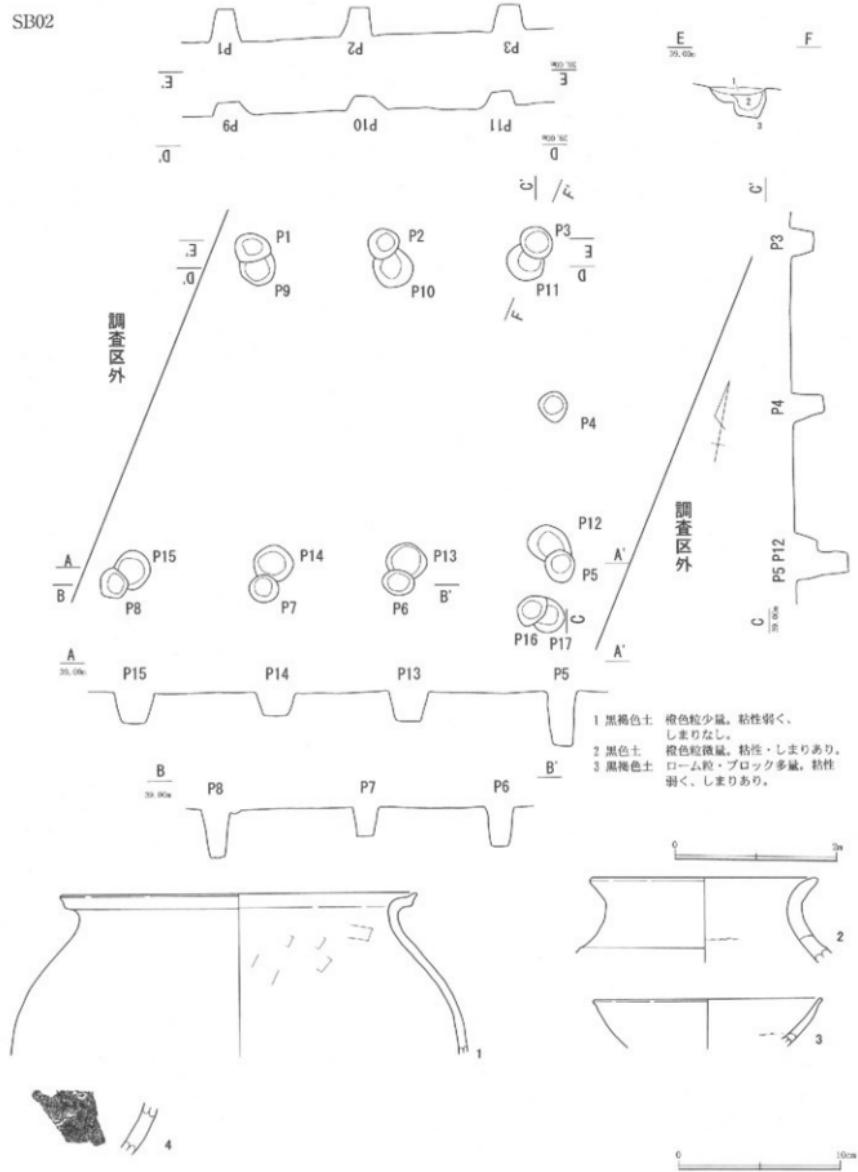
遺物は土師器甕、須恵器甕などでP1・4・7から出土した。



第24図 SB01実測図・遺物実測図

第13表 観察表 (11)

遺物名	遺物番号	跡図番号	図版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特 徴	胎土	焼成	色調
SB01	一括	24-1	18-7	上鋸器	丸	-	-	-	外面脇部はヘラ前後の後ナデ。	小砂粒・金青母少量	普通	外面：黒色 内面：暗褐色
	一括	24-2	18-8	須恵器	丸	-	-	-	胸部ナデ。内外面自然釉付着?	小砂粒少量	普通	灰褐色



第25図 SB02実測図・遺物実測図

第14表 観察表(12)

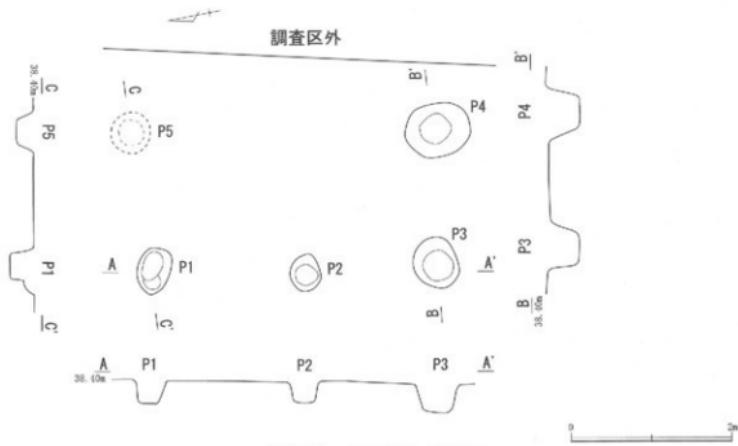
遺物名	遺物番号	神奈川県版番号	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	胎土	焼成	色調
SB02	一括	25-1	18-9	須恵器	甕	(21.4) (30.05)	-	口縁部壊ナデ。胴部外面はナデ、内面はヘラナデ。	妙粒・金雲母少量	普通	暗褐色
	一括	25-2	18-10	土師器	甕	(13.7) (5.2)	-	口縁部壊ナデ。内面粘土痕痕あり。	大砂粒微量、小砂粒少量	普通	外側：緑色、内側：赤褐色
	一括	25-3	18-11	須恵器	甕	(13.8) (2.95)	-	内外面口縁部から体部は横ナデ。口縁部に陶物付着。内面に粘土痕痕あり。	小砂粒中量	普通	黒褐色
	一括	25-4	18-12	須恵器	甕	-	-	外面はヘラ削りの横ナデ、内面はナデ。	小砂粒・黒雲母少量	普通	外側：黒褐色、内側：暗褐色

SB03 (第26図)

調査区中央、L-4グリッドに位置し、標高38.3mを測る。全容は不明であるが、おそらく2間×2間の側柱式掘立柱建物と予想される。

柱穴は4本検出し、調査範囲内の規模は梁行3.6m・桁行1.8m、柱間寸法は梁行1.8m・桁行1.7~1.8mである。柱穴形態は径45~60cmの不整円形を呈し、深さ30~40cmを測る。

出土遺物はない。

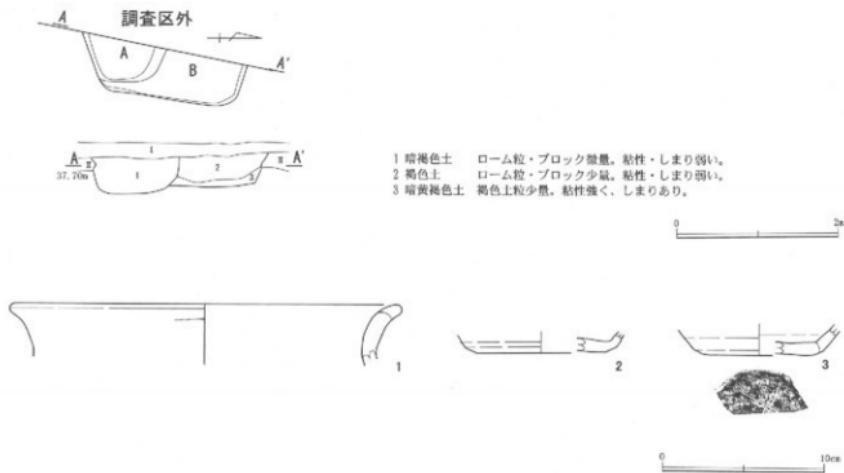


第26図 SB03遺物実測図

5 その他

SX01 (第27図)

調査区南側、G-3グリッドに位置し、標高は37.8mを測る。2つの土坑からなり、西側は調査区外で全容は把握できないが、調査区内ではAがBを切っていることで新旧関係が理解できる。断定はできないが、Aは径0.5mの不整円形を、Bは長軸2.15m・短軸(0.6)mの梢円形を呈すると考えられる。



第27図 SX01実測図・遺物実測図

第15表 観察表 (13)

遺物名	遺物番号	鉢形番号	底版番号	種別	器形	口径	器高	底深	特徴	粘土	焼成	色調
SX01	一括	27-1	18-13	土師器	甕	(24.0)	(3.7)	-	I1縁部植ナデ。	砂粒中量	普通	にぶい褐色
	一括	27-2	18-14	須恵器	环	-	(1.35)	(7.8)	底部手持ちヘラ削り。	砂粒少量	普通	灰褐色
	一括	27-3	18-15	須恵器	坏	-	(1.5)	(7.0)	底部外周から底面へラ削り。底部外面にヘラ記号「×」。	砂粒・黒色スコリ ア中量	普通	灰褐色

III まとめ

平成16年度における、小原遺跡の本調査時に検出された遺構や遺物について、その概要を述べてきた。

調査区内から検出された遺構には竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡3棟、ビット群1基、土抗3基、溝状遺構1条などがある。これを時代別にみると次のようである。

まず、縄文時代の遺構には、土抗3基（SK01～03）がある。いずれも伴出遺物はないが、昨年度に調査した南側調査区でも同形態の土坑を検出しており、その内の1基より加曾利E2式土器が出土している。覆土も同様であることから、これらは縄文時代中期後半の遺構であろうと判断した。するとこれらの土坑群はいずれも台地の縁辺付近に検出されており、調査区南側の低地をはさみ、南北の緩傾斜面には多数の土坑が存在するものと思われる。

弥生時代には、竪穴住居跡2軒（SI04・05）、ビット群1基（PG01）、溝状遺構1条（SD01）がある。古墳時代から古代には、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡3棟などがある。さらに中世以降の溝状遺構などがある。

さて、調査範囲がきわめて限られている現状において、当地区周辺の歴史的様相を明らかにすることは困難であるが、これまで3年次にわたる調査成果を踏まえながら、資料的にやまとまっている弥生時代および古墳時代以降古代について簡単に考察し、まとめとしたい。

1 弥生時代

弥生時代は、住居跡2軒、溝状遺構1本、ビット群1基を検出した。これらの遺構は、出土遺物・覆土からいずれも弥生後期後半期に属するものである。

茨城県遺跡地図を参照すると、涸沼前川上流域では弥生時代の遺跡が極めて少なく、『友部町史』でも町内の弥生遺跡は8遺跡を数えるにすぎない（友部町1990）。しかしながら、友部町を含め涸沼前川上流域の地形は、小支谷が多く弥生後期の遺跡形成に適した立地景観から、遺跡の存在が発見される可能性が指摘されていた（川又1999）。近郊農村地帯のために、これまで開発に伴う発掘調査があまり実施されてこなかった。このため、遺跡分布の実態がはっきりしなかった気味もある。

こうした見通しを裏付けるように、近年になって、涸沼前川を望む台地上に弥生後期集落の存在が浮かび上がってきた。すなわちこの度の調査に連動する、小原地区（南区）の三本松遺跡（2003）および小原地区（北区）小原遺跡（2004）の調査において、弥生時代後期の集落の一部が確認されていた。この両調査地区は、同じ台地上に連なり接していることから、この台地一帯に大規模な集落が営まれていたであろうと想定されている（服部2004）。遺跡地図上では三本松遺跡、小原遺跡、一本松古墳群に分かれているが、本来は3遺跡が統合されで広大な範囲に線引きされるのであろう。

本年度の小原遺跡の調査も、道路幅に限られるトレーナー調査のために集落範囲のごく一部を発掘したにすぎないが、上記した遺構・遺物の発見があり、涸沼前川上流域における弥生文化の様相解明に、一定の成果を得ることができたといえよう。

（1）遺構について

住居跡は未調査部分を残すものの、10mの間隔を置いて2軒が検出された。

住居跡の平面形は隅丸長方形ないし隅丸方形を呈するもので、主軸はN-30°-WからN-53°-Wとほぼ一定方向を指す。住居規模はSI05が18m²前後、SI02も概ね20m²以下と想定される。SI05の勾跡は住居の中央やや北側に在る地床炉で、住居主軸にそって楕円形をなす。後期後半の当地域には炉石が伴う割合が高いとされるが、炉石はなかった。

第16表 住居跡規模一覧表

遺跡名	遺構名	規模 (m)	面積 (m ²)	主軸方向	住居形態	炉形態
小原 (2004)	SI-2	(5.0)	(3.5)	N 60° - W	隅丸方形?	楕円形?
小原 (2005)	SI-04	現3.6	3.3	(1189)	隅丸方形?	不明
*	SI-05	(4.8)	3.8	(1824)	隅丸長方形	楕円形
三本松 (2003)	SI-45	5.0	3.9	19.50	隅丸長方形	楕円形
*	SI-5	5.5	4.35	23.93	隅丸長方形	楕円形
*	SI-66	(6.0)	4.0	(24.00)	N 60° - W	長方形?
*	SI-28	5.8	4.2	24.36	N 40° - W	隅丸長方形
*	SI-33	5.9	4.5	26.55	N 70° - W	隅丸長方形
*	SI-74	6.9	4.0	27.60	N 70° - W	長方形
*	SI-86	6.4	4.5	28.80	N 30° - W	長方形
*	SI-42	5.8	5.0	29.00	N 50° - W	長方形
*	SI-79	5.5	5.5	30.25	N 30° - W	方形
*	SI-54	6.7	5.1	34.17	N 30° - E	長方形
*	SI-77	6.4	5.8	37.12	N 55° - E	長方形
*	SI-44	7.5	5.3	39.75	N 65° - W	隅丸長方形
*	SI-42	2.5	現4.1	(10.25)	N 65° - W	長方形?
*	SI-78	現1.7	3.7	(6.29)	N 50° - W	不明
*	SI-80	現2.4	4.4	(10.56)	N 60° - W	長方形?

※ () 内の数値は測定値

住居跡は、一昨年度に調査した三本松遺跡で15軒、昨年度に調査した小原遺跡で1軒、そして今年度の調査で2軒が検出され、計18軒を数えるに至った。遺跡範囲における調査面積がごく小さいものであることを勘案すると、本遺跡は、県下でも有数の規模をもつ弥生時代集落になるのかも知れない。それはともかく、これまでに検出された住居跡を観察表にまとめると、次の傾向がうかがえる。

- ① 住居跡は、主軸をN -30° - WからN -70° - W方向にとるものが多い。
- ② 住居形態には、隅丸方形・隅丸長方形・長方形が見られる。
- ③ 住居跡の面積規模は20m前後・25~30m前後・35m前後の3群に大別される。

この情報を潤沼前川流域における十王台式期の遺跡（矢倉遺跡・大畠遺跡）の事例と比較してみたい。

両遺跡は潤沼前川の下流域で、川を挟んで直線距離約600mの位置に対峙しており、十王台式期の住居跡が矢倉遺跡で25軒・大畠遺跡で10軒ほど検出されている。

形態的には隅丸方形・隅丸長方形が主体を占める。規模は矢倉遺跡が10~40m前後・大畠遺跡は20~45m前後で、双方の遺跡に大小の差を見られるが、これには住居数の差によるのかも知れない。小原遺跡・三本松遺跡で人別した3群もこの範疇であり、当期における類例と適応する。

ところで、海老澤稔氏はかつて後期の住居形態・規模から各時期の特徴をまとめて、1~5期に大別し（1989・1993）註1、さらに、「規模別の割合では各時期において30m以上の大型のもの、20~30mの中型のもの、20m以下の小型のものが組み合わさり、3~5軒ぐらいいの小グループを構成している。大型住居はそのグループの中心世帯の可能性がある」という。これに依拠するならば、本遺跡の住居跡群も集落内においてグループを構成する単位の一部をなしていると言えるであろう。

SI05からは主柱穴が4本検出されたが、SI04から検出された2個のビットの方は、深度や検出位置などから主柱穴とはい難い。小型住居には主柱穴が皆無なものや1~2個のものもあり、住居構造が異なるものと思われる。仮に2ヶ所のビットが出入口施設に関連するものであるならば、主軸線上の東側に配されるSI05とは違い、短軸線上の南側に位置する。海老澤氏によれば、このような短軸線上に位置する例は5期後半になって出現したとされる。

ビット群として報告したPG01は、報文中に記したように住居跡の可能性も考慮したが、確信は得られなかっ

た。しかし本遺構周辺からSI04にかけて、実測復元された第11図8を始め、遺物が比較的まとまって出土しており、住居跡との関連に注意を要しよう。

(2) 遺物について

出土した弥生土器は、壺形土器1個体のほかは小破片で、しかも遺構でもまとまった出方はしなかった。全城から散漫に出土しているが、その中でも標高37.5m～38.5mの範間にやや濃密なことから、SI04・05、PG01といった遺構に関係するものと思われる。土器の文様構成・器形などの全容を窺い知る資料は少ないが、下記のような特徴が観察される。

- ① 口縁部文様帯は無文で幅が狭い。
- ② 貼付隆起線は、棒状工具などによる押圧により成形されている。
- ③ スリット手法は櫛歯2～3本でなされている。
- ④ 胸部文様帯の縄文は、付加条二種（付加一条）が主体で、しっかりとした羽状構成をとる。
- ⑤ 底部には布目痕もあるが、木葉痕が目立つ。

十干台式の編年に関しては、先学諸氏によりいくつかの案が提示されており、大筋で合意しているものの細部で一致しない。本遺跡の土器をこれに対比すると、①・②などの特徴では十干台式でも比較的古手に比定されそうである。

また近隣地域における関連性を示唆する土器も出土している。SI04（第8図3）・SI05（第9図4）などにみられる縄文施文の複合口縁を呈する資料は二軒屋式系・上稻吉式系と考えられる。十干台式にはあまり見られないとする底部木葉痕が本遺跡には多い。これまでの調査においても、二軒屋式系・上稻吉式系土器が出土しており、十干台式土器はない近隣地域の文化的交流が盛んであったものと考えられる。

最後に、この度の調査で出土した中で唯一、復元された壺形土器（第11図）について概観する。その特徴は観察表を参照されたいが、口径19cm、高さ52cm、底径13cmで最大径が上胴部にある、丈高の草々たる壺形土器である。約66°の急角度で底部から直線的に立ち上がり、上胴部でゆったりと内湾してすばまり、綿まつ頸部から垂直気味に立てやや開口する口縁へと移行する。このプロポーションは十干台式に先行する束中根式に通じるものがあるが、最も特徴とするのは、体部全面に施された縄文装飾である。すなわち、口縁下に2条の貼付隆起線があり、その下から底部まで隙間なく燃りの異なる縄文がおよそ4.5cm間隔で12段にわたって重疊施文されている。単節縄文のように見えるが同じ燃りでも2本の太さを少し違えた異条縄文、直前段反撲、附加条縄文などが装飾的効果を狙って交互に配置されている。この縄文時代以上に縄に拘泥している様は、製作者の遊び心のようにも見えるが、むしろ縄文文化を継承する地域集団が西から進攻する弥生文化に対する抵抗感を矜持として、この土器に結集したようである。その意味で茨城県下における弥生集団の象徴的な遺物といえよう。

（小宮山）

2 古墳時代以降古代

古墳時代から古代に属する遺構としては、堅穴住居跡が4軒、掘立柱建物跡が3棟確認された。しかし調査範囲が狭長であったことと、遺構に伴うまとまった遺物が得られなかつたことから全容を解明するには至らない。

まず、古墳時代の遺構にはいずれも後期に属する堅穴住居跡として、SI01・SI02・SI06がある。SI01は約半分の確認ながら、竈や柱穴等を検出できた。また、この住居は、西壁側に拡張が行なわれ、それにともなって新らたなカマドが構築されている。あるいは単独の棚状施設をもつ住居跡である可能性もある。遺物（第15・16図）は覆土上中層から、おおまかに7世紀前葉と考えられる土師器壺瓶類がまとまって出土した。SI02は、調査範囲が限定されて遺構の一部を確認するにとどまった。遺物も外からの流入と思われるものが多く、時期の決定

はやや困難であったが、覆土や形態から古墳時代後期と判断した。帰属すると思われる遺物（第17図）を掲載しているが、7世紀後葉を中心と考えたい。SI06は調査区北側の縁辺部に位置している。近代の道等の転圧・削平が著しいため、遺存状況は不良である。詳細は前述の通りであるが、本址は他に比べて規模がやや大型の住居跡である。出土遺物（第19図）には床直上のものはないが、若干磨きのこる球型崩の壺や暗文を多用する加飾のある壺類から、6世紀後半の時期と考えられよう。

古代の遺構にはSI03・SB01～03がある。SI03は部分確認ながら、主軸がほぼ北を指し、北壁に造り付け窓をもつ住居跡である。覆土から出土した伴出遺物（第22・23図）はわずかであるが、常絶型の壺、在地産の須恵器などから8世紀前葉と考えたい。この時期の遺構は本堅穴住居だけであるが、三棟の掘立柱建物の方は遺物や覆土からおおまかには古代と思われる。SB01とSB02とはいずれも主軸がほぼ東西を指し、形態や規模も同様と思われる。繩文土坑（SK02）を切るSB03は梁行において明確に小規模となり、また主軸についても前者2棟に比べその方向を違えることが、あきらかであり、時期差と考えられよう。しかしながら、いずれの掘立柱建物も遺物が僅少で時期ははっきりしない。とくにSB03は出土遺物がなくSI03との時間差などの詳細は不明である。

以上、古墳時代から古代にかけて概観したが、本調査区周辺にはさらに当該期の集落の広がりが予想される。南西約400mには平成15年度に調査した部分があり、その調査で古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。したがって小原遺跡（集落跡）はそこまで広がると判断される。しかし、平成15年度調査区には、古墳時代後期・古代はまったく検出されず、一方、今回の調査区では古墳時代前期の遺構はなく、遺物もほとんど出土が見られなかった。このことは、特に古墳時代から古代にかけては、本調査区南側の小支谷を介して、双方の台地の集落に時代差が認められるのではないかとも考えられる。双方の調査区ともきわめて限られているので、一概に判断するのも無理があるが、今後の調査により、この小原遺跡の中央部を割るように点在する一本松古墳群と集落の関係がより明らかにされることが期待される。

（吉田）

註1 近年では第5期をさらに4区分しⅦ期区分を提示している（2000）

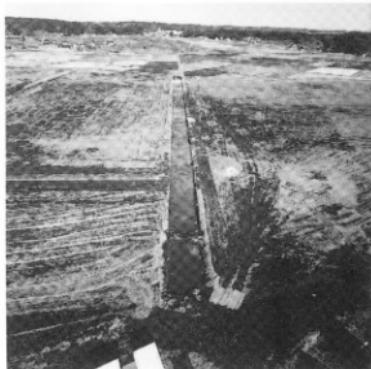
参考文献

- 飯島 一生 1998 「十王台式土器の相違を考える」『研究ノート』8号
茨城県考古学協会・十王町教育委員会 2000 「茨城県における弥生時代研究の到達点」
海老澤 稔 1989 「恋瀬川流域における弥生後期の土器変遷について」『茨城県史研究』62号
海老澤 稔 1993 「弥生時代後期の住居形態について」『婆良岐考古』15号
海老澤 稔 2000 「茨城県における弥生後期の土器編年」『婆良岐考古』22号
勝田市史編さん委員会 1961 『勝田市 原始・古代編』勝田市
川又 清明 1999 「潤沼前川流域における弥生時代後期の遺跡の分布状況」『研究ノート』9号
（財）茨城県教育財團
友部町 1990 『友部町史』
友部町三本松遺跡発掘調査会 2003 『茨城県友部町三本松遺跡』大成エンジニアリング株式会社
友部町小原遺跡発掘調査会 2004 『茨城県友部町小原遺跡』大成エンジニアリング株式会社
服部 敬史 2004 「IVまとめ」『茨城県友部町小原遺跡』
弥生時代研究班 1989～1999 「茨城後期弥生式土器編年の検討」『研究ノート』1～11号 （財）茨城県教育財團
瓦吹 堅他 1976 『高寺2号墳』友部町教育委員会
千種重樹他 1994 『小原香取・坂場遺跡』友部町小原香取・坂場遺跡発掘調査会

- 池田晃一他 1999 『寺山遺跡・東平遺跡・坂ノ上塚群』北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 茨城県教育財団調査報告第150号
- 能島 清光 2004 『北平遺跡発掘調査報告書』友部町北平遺跡発掘調査会

写 真 図 版

図版 1



1 調査区全景



2 調査区全景



3 調査風景

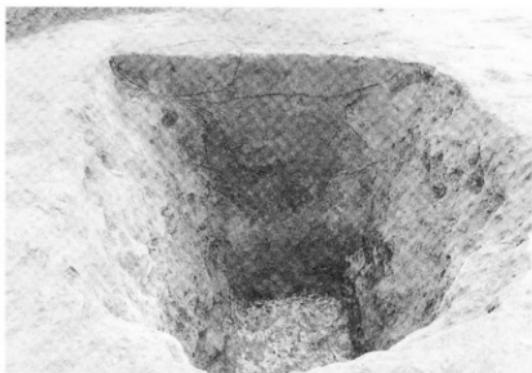
図版 2



1 SK01 完掘状況
(南から)



2 SK01 土層断面
(南から)



3 SK02 土層断面
(北西から)

図版 3

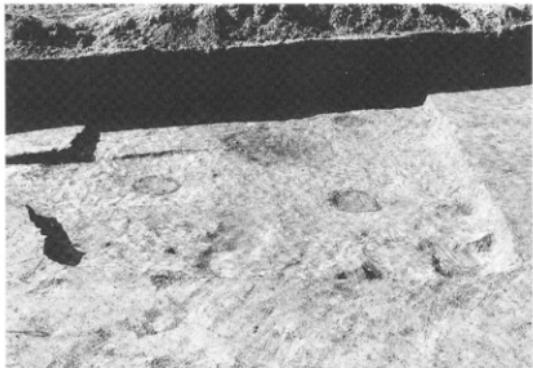
1 SK03 土層断面
(東から)



2 SI04 完掘状況
(西から)



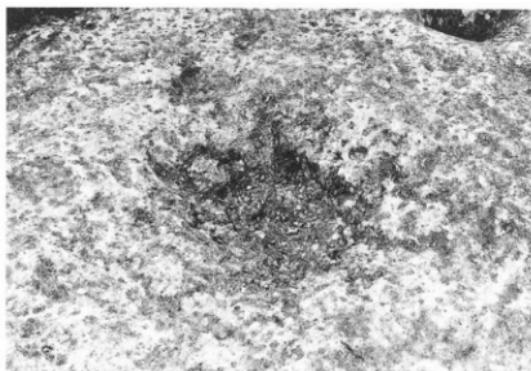
3 SI05 検出状況
(東から)



図版 4



1 SI05 完掘状況
(東から)



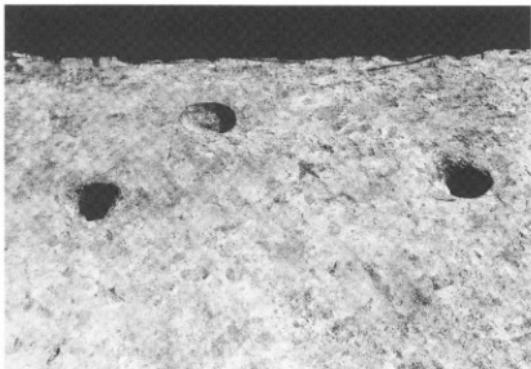
2 SI05 炉跡完掘状況
(東から)



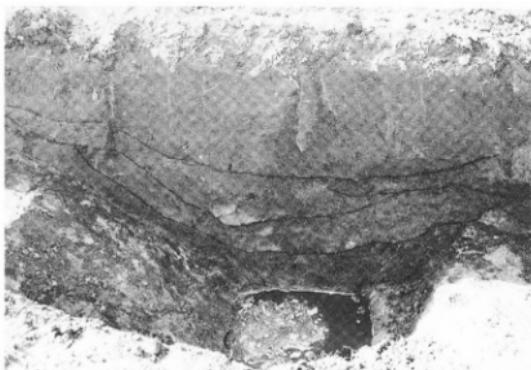
3 SI05 炉跡土層断面
(南から)

図版5

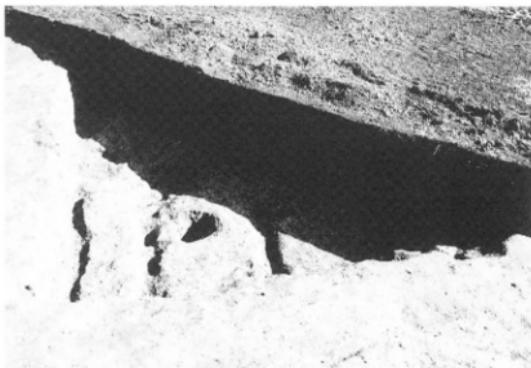
1 PG01 完掘状況
(西から)



2 SD01 西壁土層断面
(東から)



3 SI01 掘り方
(南西から)



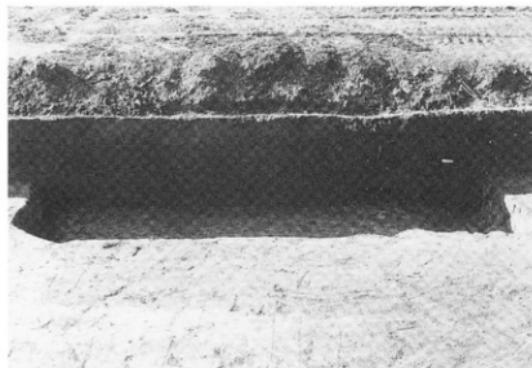
図版 6



1 SI01 検出状況
(南東から)



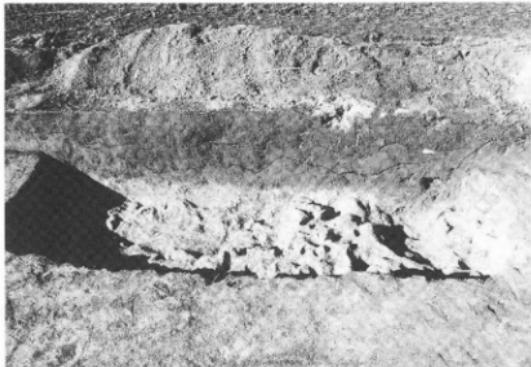
2 SI01 カマド土層断面
(西から)



3 SI02 完掘状況
(東から)

図版 7

1 SI02 掘り方
(東から)



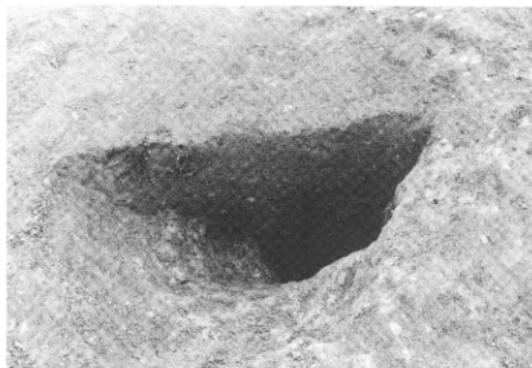
2 SI06 完掘状況
(南から)



3 SI06 東西土壠断面
(東から)



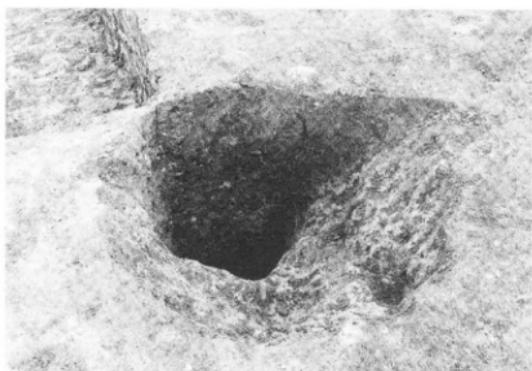
図版 8



1 SI06 P1土層断面
(西から)



2 SI06 P2土層断面
(西から)



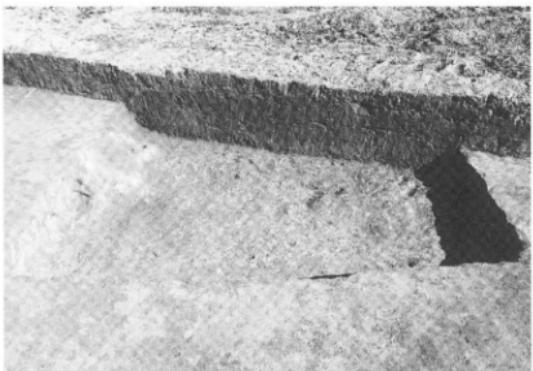
3 SI06 P3土層断面
(西から)

図版 9

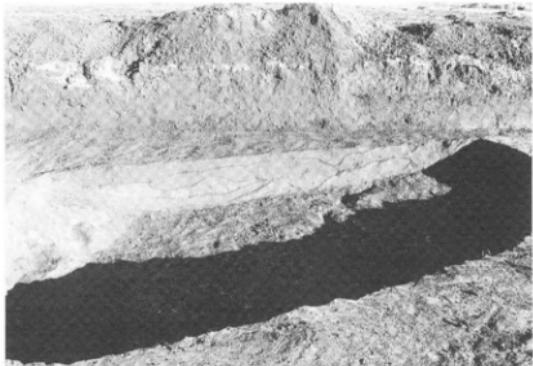
1 SI03 完掘状況
(南から)



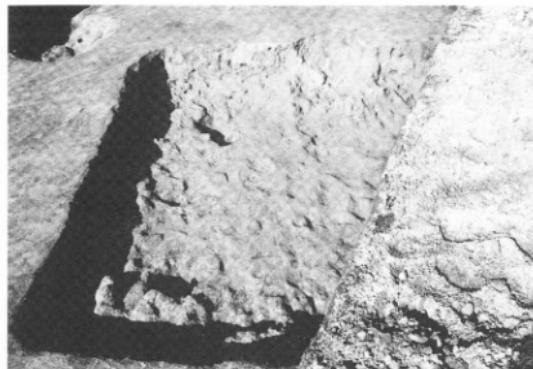
2 SI03 完掘状況
(西から)



3 SI03 土層断面
(西から)



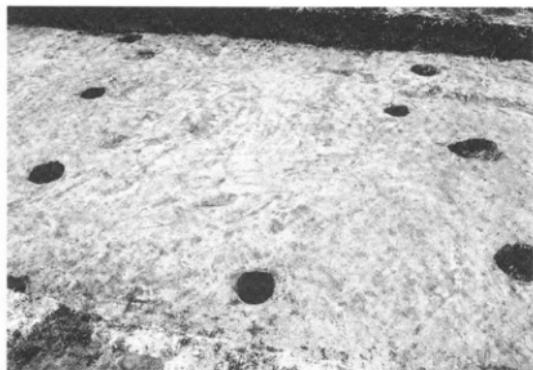
図版10



1 SI03 掘り方
(南から)



2 SI03 カマド上層断面
(南から)



3 SB01 完掘状況
(西から)

図版11

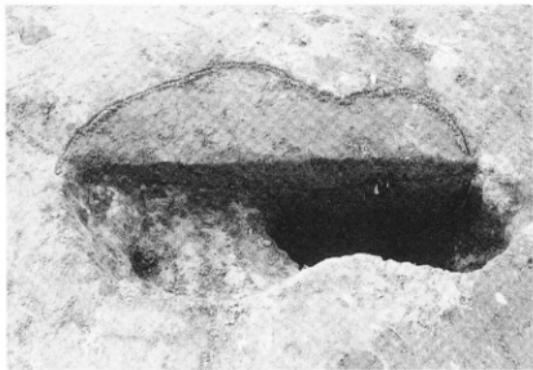
1 SB01 P6土層断面
(南から)



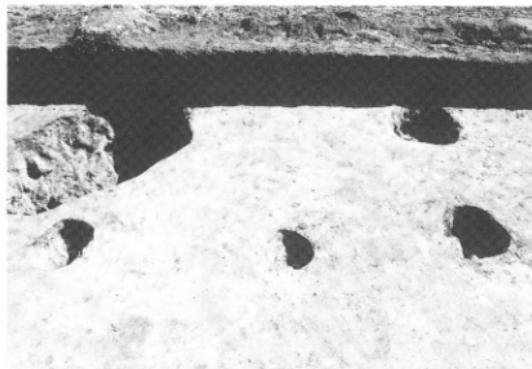
2 SB02 完掘状況
(東から)



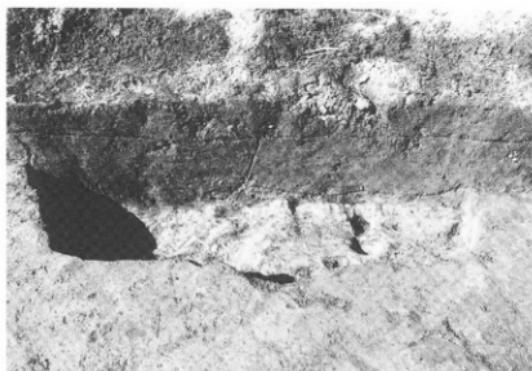
3 SB02 P3上層断面
(東から)



図版12



1 SB03 完掘状況
(西から)



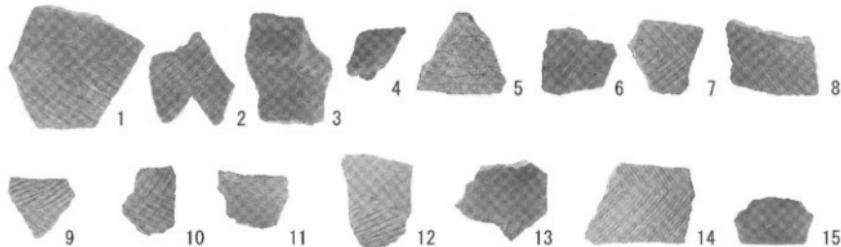
2 SX01 完掘状況
(東から)



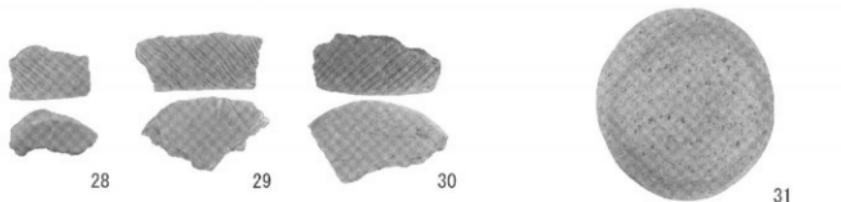
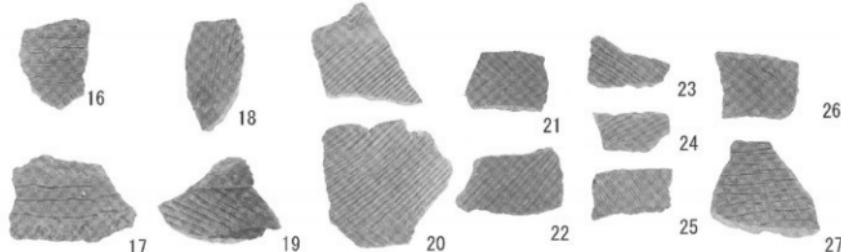
3 調査風景

図版13

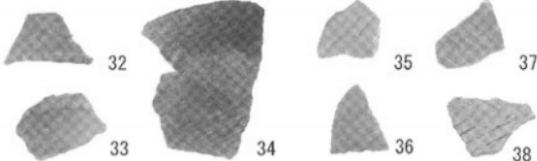
SI04



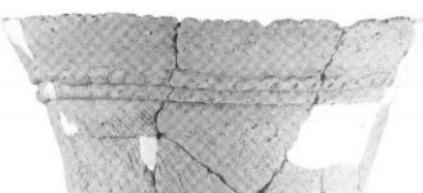
SI05



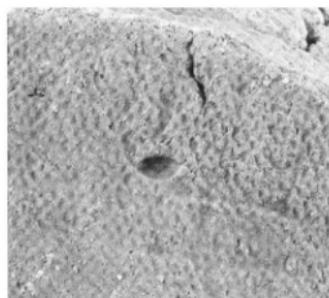
PG01



SI04・05・PG01出土遺物



口縁部隆帯 (S=1/2)

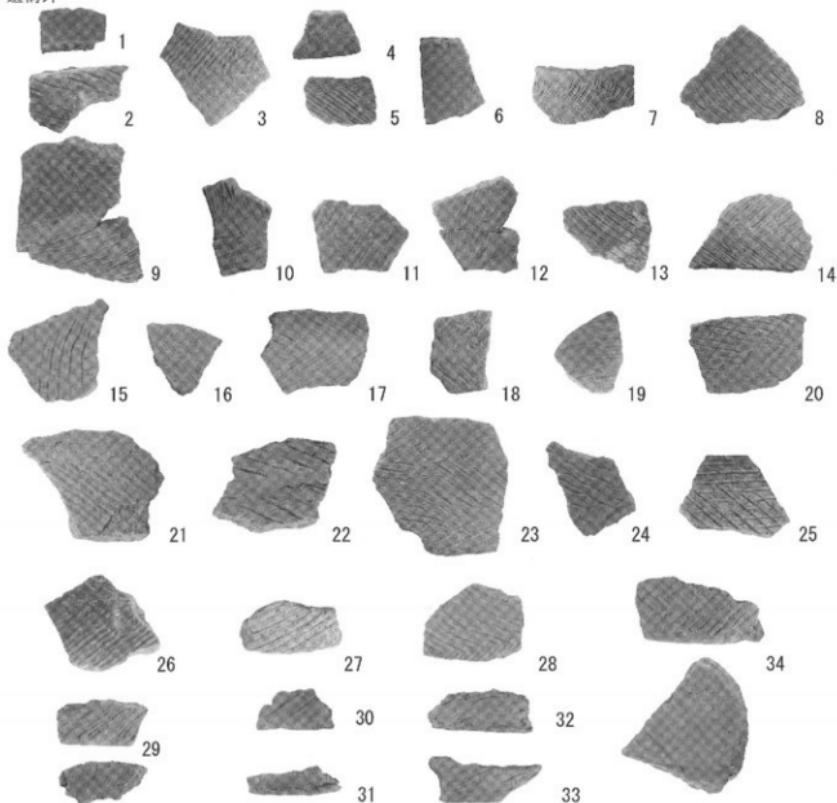


底部糊痕 (S=x 2)

PG01出土遺物

図版15

遺構外



SI01



遺構外・SI01出土遺物

SI01



図版16

1

2

3

4

5

6

10

11

12

13

14

15

SI02

17

19

20

21

22

16

18

23

24

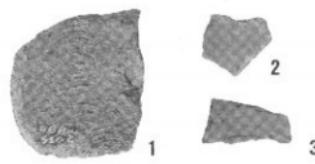
25

26

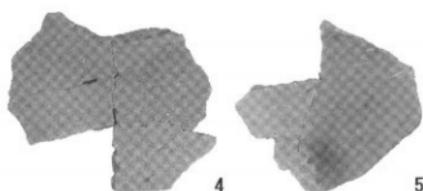
SI01・SI02出土遺物

図版17

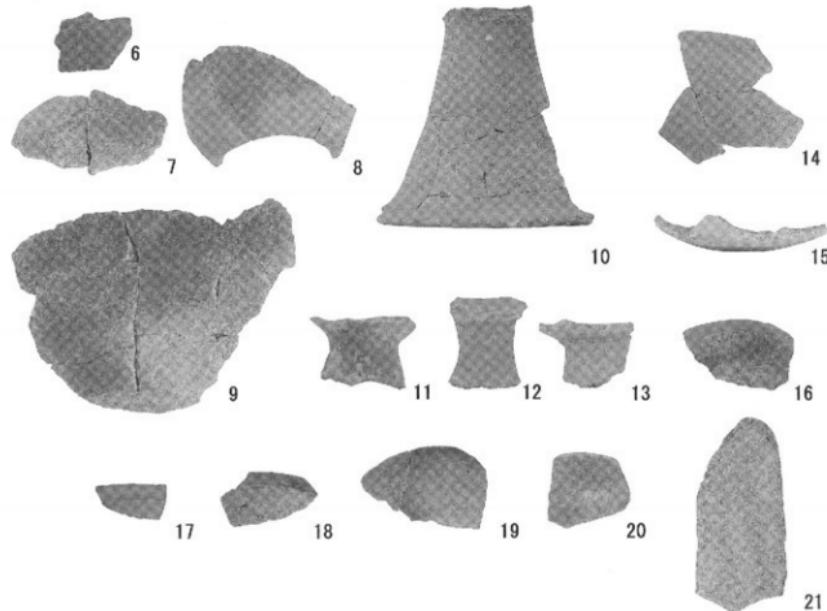
SI02



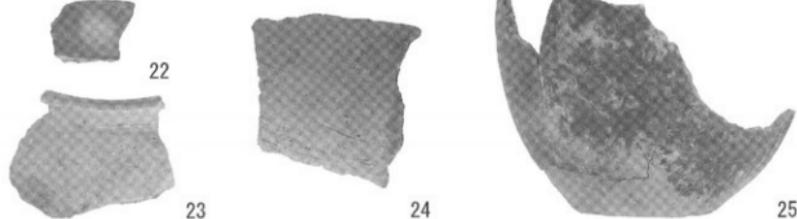
SI06



SI06



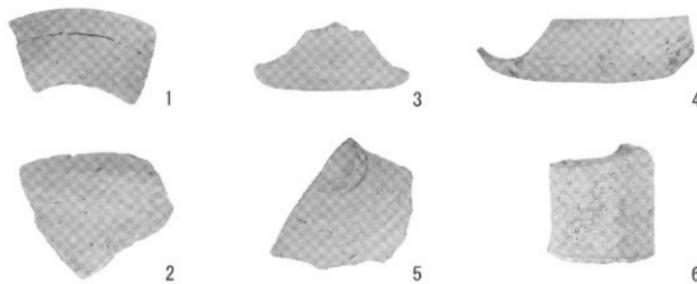
SI03



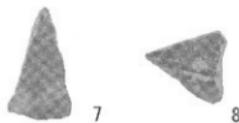
SI02・SI06・SI03出土遺物

図版18

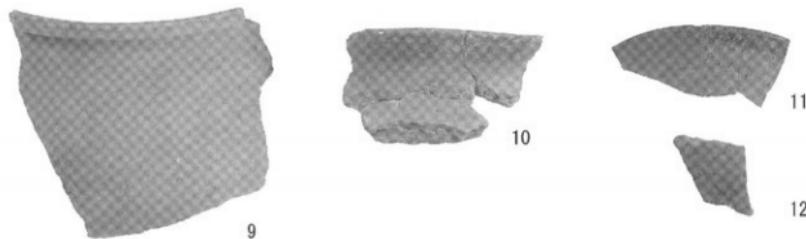
SI03



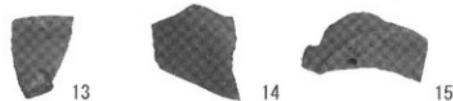
SB01



SB02



SX01



SI03・SB01・SB02・SX01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おばらいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	小原遺跡発掘調査報告書						
副書名	県営畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
卷次							
シリーズ名	友部町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号							
編著者名	吉田寿・小宮山友康・小野真美・山崎裕子						
編集機関	大成エンジニアリング株式会社						
所在地	〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 TEL03-5285-3155						
発行年月日	西暦 2005年 3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
小原遺跡	茨城県西茨城郡 友部町小原 624番地外	8321	36度 21分 49秒	140度 19分 57秒	2004年11月5日 ～ 2005年2月10日	1,080m ²	土地改良工事
収録遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物		特記事項	
小原遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安時代	竪穴住居跡、 掘立柱建物址、 土坑、溝、ピット	弥生土器、土師器、 須恵器		縄文時代から古代までの複合遺跡	

茨城県西茨城郡友部町 小原遺跡

—県営畠地帯総合整備事業(一般型)小原地区(北区) 平成16年度埋蔵文化財調査報告書—

平成17年3月25日

編集・発行 大成エンジニアリング株式会社

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1

日本生命早稲田ビル8F

電話 03-5285-3155

印刷・製本 明誠企画株式会社

